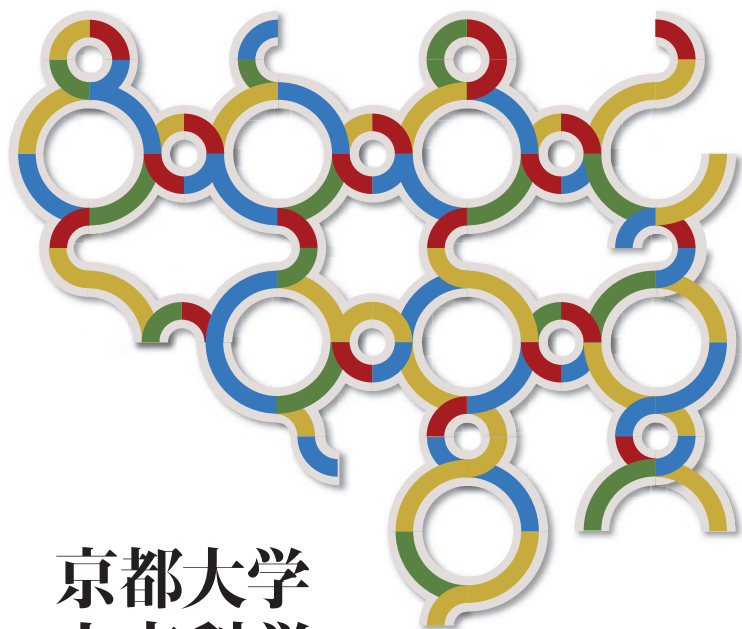


京都大学 人文科学 研究所

要覧

2008
人文科学研究の
フロンティア





京都大学 人文科学 研究所

要覧

2008

• 目次

ごあいさつ	1
人文科学研究所は何をめざすか 21世紀人文科学のフロンティア	2
制度の流れ—沿革	4
施設	6
研究・教育経費	7
研究組織	8
共同研究	10
出版物・著作	12
図書室	14
人文科学研究協会	16
研究者一覧	17
附属研究施設 漢字情報研究センター	25
附属研究施設 現代中国研究センター	28
附属研究施設 人文学国際研究センター	30
共同研究一覧	32
教育活動と社会貢献	45
講演会・人文研アカデミー	46

ごあいさつ



本研究所は、1929年、外務省によって創立された東方文化学院京都研究所（1938年、東方文化研究所に改称）、1934年設立の民間団体、ドイツ文化研究所（1945年、西洋文化研究所に改称）および1939年、当時の京都帝国大学に附置された人文科学研究所の三つの研究所が、戦後の1949年に合併し、京都大学人文科学研究所として新たに発足したものです。

このような経緯から、発足当初より「世界文化に関する人文科学の総合研究」を目標に、さまざまな分野、地域の専門家による共同研究を精力的に行い、これまで多くの成果を挙げてまいりました。共同研究には、原典を厳密に講読する基礎的研究、異分野の専門家が共通のテーマを探求する学際的研究、さらに中国、アジア地域を主とする現地調査にもとづく研究など多彩な形態がありますが、いずれも参加者の自主性を尊重し、隔週または毎週開催により密度の濃い研究を行うという設立以来の方式を維持することによって、人文学の長い伝統を正しく継承すると同時に、未来へ向けて新たな分野を開拓すべく努めており、常時、20を越える研究班が運営されております。また近年は、特に研究成果の社会への還元に力をそそぎ、所内に「人文研アカデミー」を設置して、年間を通じてさまざまな公開講演会を社会一般および京都大学の全学共通科目に提供し、多くのご支持をいただきました。

2008年4月、長らく東一条にあった本館が大学の方針により吉田本部構内へ移転いたしました。これにより北白川の分館は漢字情報研究センターがもっぱら使用することとなり、センター以外の教職員がみな新本館に移り一堂に会し、本研究所は名実ともに一体化した研究機関として、新たなスタートを切ることとなりました。今後とも附属の漢字情報研究センター（2009年より東アジア人文情報学研究センターに改組予定）、現代中国研究センター、国際人文学研究センターともども、本研究所が所蔵あるいは蓄積する研究情報を広く世界に向けて発信し、利用に供するとともに、最先端の研究成果を公表し、関連諸学界の発展に寄与することによって、人文学の国際的な拠点としての機能をはたすべく、所員一同いっそうの努力を傾ける所存でございます。

研究所の現状と研究体制をわかりやすく簡潔に紹介したこの冊子を通じて、みなさんの本研究所についてのご理解がより深まり、これまで以上のご支援とご協力を賜ることができれば幸いです。さらに詳しい情報をお知りになりたい方は、本研究所のホームページ（<http://www.zinbun.kyoto-u.ac.jp>）をも併せてご参照くださいますようお願い申し上げます。

2008年12月

京都大学人文科学研究所長 金文京

21世紀人文科学のフロンティア

現在、人文科学は大きな転機を迎えている。ヒトゲノムの解読をはじめとする生命科学の発展や、認知科学、情報科学の進歩は、人間についての認識を大きく変えつつある。その一方で、環境問題が端的に示しているように、人間と自然の関係を問い直すことも要請されている。また、これまで世界の諸文化を考察するさいの枠組みはおもに国民国家によって規定されてきたが、この枠組みの問題性もあらわになってきている。こうしたなか、人文科学の全領域で新たな問題群が登場し、従来の専門分野の設定やそこで前提とされてきた視点や方法が根本的な再検討を迫られることとなったのである。しかし人文科学に期待されている役割も大きい。とくに近代世界を形作ってきた諸価値や技術的達成が内包する問題が噴出し、今日、人間の生き方とその歴史的展開を明らかにし、そのあるべき姿を研究する人文科学の重要性はますます増大しているといえる。

京都大学人文科学研究所は、70年以上にわたって蓄積されてきた成果の上に立ちつつ、現代の人文科学が直面する諸課題に取り組もうとしている。その根幹をなすのが、共同研究とフィールドワークである。

共同研究 — 知の協働

テーマごとに研究者を組織してすすめる共同研究は、いまや各分野でひろくおこなわれている。しかし、毎週あるいは隔週、異なった分野の班員が集まってテキストの解読や研究報告、討論を重ね、3から5年の期間終了後に、論文集や校訂テキスト、訳注などを公刊して研究成果を社会に還元する——こうした方法が人文科学や社会科学の分野においてきわめて有効であることを国際的に認知させたのは「人文研の共同研究」である。

共同研究は現在も人文研の研究活動の主軸である。これまでは研究所スタッフ、京都大学内の研究者、そして主として関西地方在住の研究者が参加して運営されてきたが、近年は海外の研究者も多く参加し、国際共同研究の様相を帯びる研究班も増えている。人文科学研究所は今後も共同

研究の体制を強化し、広い視野からの議論と綿密な分析を重ねあわせることで、新たな研究成果を生み出すことを目指している。

また、文化そのものが全地球的な情報化社会の到来のなかで変化しつつある今日、人間の文化を対象とする人文科学研究所の共同研究においても、新たな手段、方法が模索される必要がある。現在、われわれは実験的な共同研究のあり方を追求し、研究組織と方法、および課題設定の両面から、新たな時代の共同研究のスタイルを作り上げようとしている。

フィールドワーク ― 知の探査

わが国における組織的な海外学術調査は、旧東方文化研究所や統合後の人文科学研究所によって切り拓かれてきたといっても過言ではない。そこでは戦前、戦後にわたって、中国、西南アジア、アフリカ、ヨーロッパの各地域において学術調査の経験と実績が積み重ねられてきた。

現在では、海外でのフィールドワークや文献調査が日常的かつ多様な仕方でおこなわれるようになったため、大規模な調査隊の派遣というスタイルはとらず、海外の研究者との国際的な共同プロジェクトの一環としてフィールドワークをおこなうことが多い。また、歴史的な文献資料についての知見と最新の現地調査の成果を相補的に用いて、文明地域の研究を進展させようとする研究手法も模索されている。いずれにしても、そこでは調査、発掘、分析、精読といったさまざまな研究プロセスの有機的かつ独創的な結合をつうじて、真に国際的水準に立つ研究成果を上げることが目指されている。

共同研究とフィールドワークは、参加する個の知性が活性化され、そこに起こる共鳴や反撥のなかで、新たな視点や問題の発見がなされる場である。人間社会の直面するさまざまな問題が国境をこえて全球化し、多方面からの接近が求められている今日、この二つの方法をさらに発展充実させることが人文科学研究所の課題である。

■ 制度の流れ—沿革

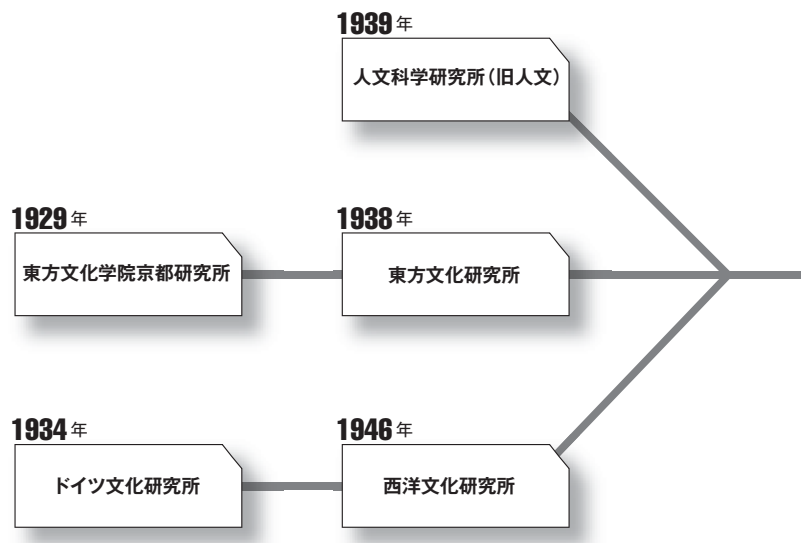
現在の京都大学人文科学研究所は、1939年に設立された同名の研究所（旧人文）と、東方文化研究所及び西洋文化研究所が合体して、1949年1月に発足した研究機関であり、3研究所のそれまでの業績を継承しつつ、世界文化に関する人文科学の総合研究を行うことを、その目的としている。

東方文化研究所

統合された3研究所の中で最も歴史が古い東方文化研究所は、1929年、中国文化を中心とした学術研究を目的として、外務省から助成金をうけ、東京と京都に設立された東方文化学院の京都研究所の後身である。東方文化学院京都研究所は発足当初は研究員4名、助手4名にすぎず、所屋も京都大学文学部陳列館の一隅を借用していたが、1930年11月、北白川小倉町50番地（現東小倉町47番地）に新所屋が完成した。現在も本研究所附属の漢字情報研究センターとして使用されている白亜の建物がそれである。ちなみに、この建物は、研究所評議員濱田耕作の創意をもとに、東畑謙三氏が設計したスパニッシュ・ロマネスク様式の、極めてユニークなもので、今日に至るまで世人の注目を集めている。1938年4月、東方文化学院が改組され、京都研究所は独立して東方文化研究所と改称された。この頃には、研究員、副研究員、助手、嘱託員など30名以上の所員が、経学・文学、宗教、天文・暦算、歴史、地理、考古の6研究室に分属して研究活動に従事する体制も整っていた。なお東方文化学院時代の所長は狩野直喜であり、東方文化研究所時代の所長は松本文三郎と羽田亨であった。

西洋文化研究所

一方、西洋文化研究所は、1934年に民間団体として設立されたドイツ文化研究所（吉田牛ノ宮町1番地）を、1946年に改組した研究機関で、数名の研究員を委嘱して、イギリス・アメリカ・ドイツ等の文化の研究に従事することになっていた。しかし、所屋をはじめ3000冊をこえるドイツ関係の書籍を含む一切の設備が、占領軍に接収されたため、その活動を停止せざるを得ず、結局土地所屋は接収解除とともに京都大学に寄付され、すでに発足していた現在の人文科学研究所の所属に帰した。なお、この所屋も村野藤吾氏の設計にかかる昭和建築史における特色ある建物であったが、維持管理をはじめとした種々の問題のため、1974年に残念ながらとりこわされた。

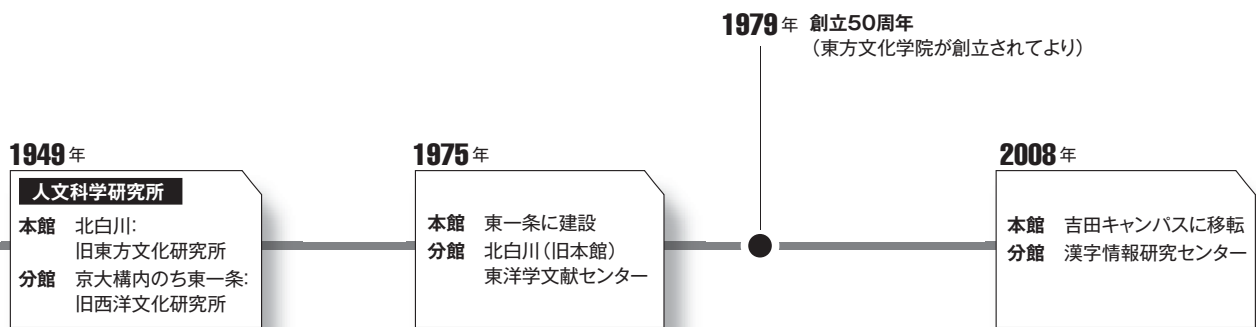


旧人文科学研究所

最後に旧人文科学研究所は、東亜に関する人文科学の総合研究を行う目的で、京都大学の附属研究所として1939年に設立された。翌年より産業経済・社会および教育・文化交渉史などからなる研究体制が整い、京都大学の文・法・経済・農の各学部の支援をうけながら、教授1名、助教授5名、兼任所員13名で発足した。所屋には大学本部構内の中央図書館西北の木造2階建の建物（現在ではとりこわされてしまった）が充てられた。なお統合に至るまでの所長は、小島祐馬、高坂正顕、安部健夫であった。

3 研究所の統合と人文科学研究所の発足

さて、旧人文科学研究所を中核として、東方文化研究所と西洋文化研究所を統合しようという動きは1946年末にはじまる。翌年に入り、西洋文化研究所を解散し、建物・設備をすべて京都大学に寄付しようとする同研究所理事会の意向をうけ、当時の京都大学総長鳥養利三郎は、東方文化研究所長羽田亨らと協議して旧人文と東方文化、西洋文化を一つにした大研究所設立の実現に動きだした。こうして、1948年4月、まず東方文化研究所が外務省から文部省（京都大学）の所管にうつされ、ついで同年11月20日3研究所を代表するかたちの3所員による公開講演を契機として事実上の統合が成立し、翌年、11部門、教授11名、助教授14名、助手19名からなる新しい人文科学研究所が正式に発足した。その後、社会人類学（1959年）、西洋思



想(1964年)、日本文化(1969年)、現代中国(1975年)、比較文化(客員1978年)、宗教史(1980年)、比較社会(1981年)、日本学(客員1985年)、言語史(1988年)の各部門が増設された。なお、比較社会部門、日本学部門は、客員部門として外国人を招聘して運用されることになった。このほか1965年には附属施設として東洋学文献センターが設けられた。1979年は本研究所の前身の一つの東方文化研究所が創立されてから満50周年を迎えたため、11月9日に創立50周年記念式典が催され、詳細な沿革を誌した『人文科学研究所50年』が出版された。

新たな研究体制へ

2000年4月、人文科学研究所は研究のいっそうの発展を目指し、また時代の要請に応えるために、全面的な改組を行なった。この結果、従来の小部門の制度を改め、5部門、1附属研究施設からなる大部門制をとることになった。すなわち、京都大学内の先端科学や学外の芸術活動と連携しつつ、所内の諸領域の協力のもとに新たな文化研究の方法をさぐる「文化研究創成部門」、諸文化の生成、継続、消滅の動態を新たな視点から研究する「文化生成部門」、非言語的素材を通して中国文化のありようを考察する「文化表象部門」、漢字文献の解読を通して中国文化のありようを検討する「文化構成部門」、多文化間の人、物、情報の関連事象を人類史的にとらえなおす「文化関連部門」の5部門である。また、当研究所の対外展開を漢字情報のデジ

タル化により支えるものとして、従来の附属施設「東洋学文献センター」を拡充、情報科学研究機能も加え、「漢字情報研究センター」に改編した。

いずれの部門においても所員は個人研究のテーマを持つと同時に共同研究に参加する義務を負う。本研究所の一つの特色をなす共同研究は、すでに東方文化研究所、旧人文科学研究所時代からの歴史を持つが、特に統合・改組以後は部・部門相互間、あるいは学際的な共同研究を組むことによって、学問が過度に専門化する弊害を防ごうとしている。当研究所はこれまで、古典学、歴史学、実地調査を柱に、緊密な人間関係のもと、国際性、持続性の高い共同研究を展開し、個人研究においても、既成の学がとりあげなかった実験的課題に長期にわたり挑戦してきた。そのような過程で深められた、人文学的関心と東洋学的関心とは、学の範疇としては次元を異にするものの、相互に刺激を与えつつ共存し、当研究所の創造力の源泉をなしてきた。この態勢を新機構でも活かすため、運営内規上の工夫として、旧日本部、西洋部を人文学研究部(文化研究創成、文化生成、文化関連の3研究部門)に、旧東洋部を東方学研究部(文化表象、文化構成の2研究部門と漢字情報研究センター)に再編した。もちろん共同研究の多くは、両研究部にまたがって展開している。

2008年5月に人文科学研究所は吉田キャンパス内の新本館へと移転し、新たな研究拠点として現代中国研究センターと人文学国際研究センターが発足した。

施設

研究所本館は、2008年5月、東一条北西角から吉田本部構内に移転した。旧工学部5号館を全面改修した新たな本館には、セミナー室・図書室・書庫などの各種スペースが設けられている。

本館

人文科学研究所本館は2008年5月、吉田本部構内の北、今出川通りに面した新たな建物に移転した。地下1階、地上4階建ての建物のうち、地下部分は工学部が使用し、地上部分の一部は工学部講義室および数理解析研究所研究室となっている。

東一条の西北角にあった旧本館は1975年に建てられたが、30年が経過して老朽化し耐震補強が必要となっていること、書庫が手狭になったこと、大学本部から移転の要請があったことなどから、本部構内への移転が決められた。移転にいたるまでには、旧工学部5号館を全面改修して研究所にふさわしい建物にかえるための検討、改修案の作成が数年にわたって続けられた。

毎年増えていく図書資料を収蔵する書庫を十分に確保しながら、漢字情報研究センターを除く全教員の研究室、事務室、図書室をはじめ、研究会を開催するためのセミナー室、特別研究員・外国人研究員などの研究室、新たな研究に必要なスペースなどが設けられている。また、研究所の附属施設である現代中国研究センター、人文学国際研究センターも入っており、新たな本館が今後の研究を支える大きな基盤として機能することが期待される。



新本館

分館

北白川の閑静な住宅街にある分館。東方文化学院京都研究所屋として1930年11月竣工。設計は東畑謙三氏。スペイン僧院を模したロマネスク様式に東洋風を加味した美しい建物で、文化庁の登録有形文化財に指定されている。写真中央の建物（尖塔の右側）が書庫、手前に研究棟を持つ。敷地4,228平方メートル、建坪2,712平方メートル。京都の中国学研究の象徴として内外に知られており、現在は漢字情報研究センターが使用している。



中庭から尖塔を見る。尖塔の右側が書庫

研究・教育経費

歳出決算等 (単位円)

	平成 17 年度	平成 18 年度	平成 19 年度
人件費	616,497,486	670,594,255	704,392,203
物件費	108,203,286	87,219,885	121,892,989
出版費	4,476,402	4,757,282	1,598,345
図書費	28,268,327	26,926,321	24,744,487
その他	272,441,758	103,139,054	124,174,424
総決算額	1,029,887,259	892,636,797	976,802,448

平成 20 年度 その他外部資金 (単位円)

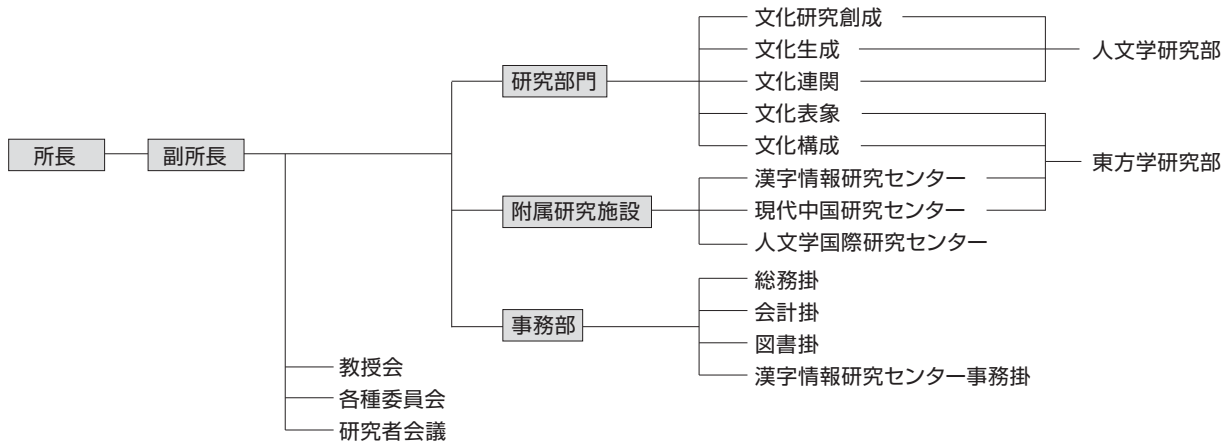
受託研究	●科学技術と社会の相互作用(市民と専門家の熟議と協働のための手法とインタフェイス組織の開発) 加藤和人 9,030,000 科学技術振興機構
	●平成 20 年度人文・社会科学振興プロジェクト研究事業「飛び出す人文・社会科学～津々浦々学びの座」 籠谷直人 500,000 日本学術振興会
	●京都大学 iPS 細胞研究統合推進拠点(再生医療の実現化プロジェクト) 加藤和人 5,000,000 科学技術振興機構
	●サステイナビリティ学連携研究機構構想 田中雅一 3,870,000 科学技術振興機構
共同研究	●現代中国地域研究(①現代中国文化の深層構造 ②現代中国政治の社会基盤) 森時彦 14,200,000 人間文化研究機構
寄附金(USD)	●The Daozang jiyao Project 研究助成 WITTERN, Christian 7,500 蔣経國国際学術交流基金會

平成 20 年度科学研究費補助金配分一覧 (単位千円)

研究種目	研究代表者氏名	直接経費	研究課題名
特定	加藤和人	12,100	ゲノム研究と社会のコミュニケーションに関する研究
小計	1 件	12,100	
基盤 S	富谷 至	13,400	東アジアにおける儀礼と刑罰——礼的秩序と法的秩序の総合的研究
小計	1 件	13,400	
基盤 A	竹沢泰子	9,500	人種の表象と表現をめぐる融合研究
基盤 A	麥谷邦夫	13,400	『道蔵輯要』と明清時代の宗教文化
小計	2 件	22,900	
基盤 B	山室信一	1,900	空間思想の比較史的検討とそれに基づく人文・社会科学理論の構築
基盤 B	池田 巧	3,400	古代 Nam 語の新研究——音検索ツールとチベットビルマ語データベースによる解析の試み
基盤 B	田中 淡	3,500	中国古代技術書の研究——王禎『農書』を中心として
基盤 B	富永茂樹	4,400	19・20 世紀における「啓蒙」の理念と実践についての系譜学的・比較的研究
基盤 B	稲葉 穰	5,700	複数文化接触領域としての中央アジアにおける宗教史の再構築
基盤 B	船山 徹	3,400	中国印度宗教史とくに仏教史における書物の流通伝播と人物移動の地域特性
基盤 B	藤井正人	3,100	南インド現存二学派の収集諸写本に基づくヴェーダ新資料の校訂と研究
基盤 B	高木博志	3,300	近代古都研究——歴史と都市をめぐる学際的研究
基盤 B	宮宅 潔	2,500	中国古代軍事制度の総合的研究
基盤 B	岩井茂樹	4,300	14～20 世紀初頭における「朝貢」・「互市」と東アジア世界秩序の変容の研究
基盤 B	田中雅一	4,800	アジアの軍隊にみるトランスナショナルな性格に関する歴史・人類学的研究
基盤 B	岡村秀典	4,300	中国の初期仏教寺院とその源流にかんする考古学的研究
小計	12 件	44,600	
基盤 C	高田時雄	800	表音文字による中国書写の歴史的研究
基盤 C	田辺明生	900	現代インド在地社会の民主化における価値と倫理の文化政治学
基盤 C	福田美穂	500	遼・金時代の都城造営に関する建築史的研究——とくに宮殿を中心として
基盤 C	武田時昌	1,200	術数学と陰陽五行説の中世的展開
基盤 C	立木康介	900	精神分析運動の歴史的展開と今日的意義を啓蒙思想の座標軸上で捉え直す試み
基盤 C	岩城卓二	500	幕末期における畿内・近国社会——戦争と災害の視点から
基盤 C	籠谷直人	1,100	アジア・ネットワークにおける制度と生存基盤に関する基礎的研究
小計	7 件	5,900	
萌芽	小関 隆	1,500	第一次世界大戦と現代世界の成立に関する超領域的研究——グローバル連関の視点から
小計	1 件	1,500	
若手 B	古松崇志	1,100	考古資料・石刻史料を用いた契丹(遼)仏教史の研究
若手 B	田中祐理子	800	20 世紀における「生物/無生物」概念の研究——思想史と医学史の視角から
若手 B	李 昇燁	800	朝鮮在住日本人社会と地方自治——居留民會・府協議会・府会を中心に
若手 B	高井たかね	1,100	明清時代における生活空間の研究——家具とその使用を中心として
若手 B	宮 紀子	1,200	東西資料によるモンゴル時代の政治・文化交流の解析と実証
若手 B	山崎 岳	1,000	明清時代の華南とヴェトナム
若手 B	坂本優一郎	1,500	近代イギリスにおける社会的インフラストラクチャーの整備と「投資社会」
若手 B	向井佑介	800	中国北朝の諸民族と文化の融合に関する考古学的研究
小計	8 件	8,300	
若手スタートアップ	小池郁子	1,350	大西洋を渡るオリシャ崇拝——アメリカ黒人の社会運動とともに変容するナイジェリア宗教
小計	1 件	1,350	
研究成果・学術図書	矢木 毅	1,900	高麗官僚制度研究
研究成果・学術図書	田中雅一	1,300	フェティシズム論の系譜と展望
小計	2 件	3,200	
研究成果・データベース	井波陵一	4,800	新・全国漢籍データベース
研究成果・データベース	安岡孝一	6,500	漢文字体変遷研究のための拓本文字データベース
小計	2 件	11,300	
基盤 B(繰越)	稲葉 穰	400	複数文化接触領域としての中央アジアにおける宗教史の再構築
基盤 B(繰越)	船山 徹	718	中国印度宗教史とくに仏教史における書物の流通伝播と人物移動の地域特性
小計	2 件	1,118	
基盤 C(繰越)	籠谷直人	560	戦後アジア・太平洋経済圏における通商秩序と日本
小計	1 件	560	
総計	40 件	126,228	

研究組織

2000年4月、人文科学研究所は1949年の設置以来半世紀以上にわたって続けてきた小部門制から大部門制に移行した。日本部、東洋部、西洋部の三部に分れていた17小部門+1附属施設を、5大部門+1附属施設に再編し、研究運営の便宜上これを人文学研究部と東方学研究部の二部に分けた。



文化研究創成部門

人間の文化を構成するのは、生物としてのヒトであり、そのヒトから成る家族や民族などの集団であり、会社や国家などの社会組織である。

文化研究創成とは、そうした文化についての研究のあり方を、既存の研究分野やディシプリンにとらわれることなく、根底から見直したうえで、新たな研究視角の提示や研究方法の創出を目指すものである。

この課題を遂行するため、本部門では宗教や芸術研究などの多岐の分野を含む人文科学と社会科学との連携ということとどまらず、人文系科学と自然科学といった境界を越えて、生命科学などの先端諸科学との対話を可能にするために学際的に編成されている。

本部門は、他の研究部門の成果を統合する結節環としての機能も担っているが、さらには研究成果をいかに国際的に発信し社会的に還元していくのかという課題に対しても、客員部門や人文学国際研究センターとともに積極的に取り組んでいる。

文化生成部門

文化が生まれ、発展し、継承されていくメカニズムの解明なしには文化の本質や根源に迫ることはできないし、錯雑化した現代の文化状況を分析し、そこから将来への展望を切り拓くこともできない。

しかしながら、文化といってもそこには政治・経済からはじまって文学・思想・美術など多種多様な領域があり、それぞれの文化領域を捉えるための方法や視角は、けっして一元的ではありえない。さらにまた文化が生まれ、変容し、伝承されていく、その様態は時代や地域において著しく異なっており、その時間と空間の違いに起因する多様性を究明することにこそ、文化研究の醍醐味があるとともに困難さも潜んでいる。

こうした時代や地域そして分野によって異なる文化のあり方を、その固有性において把握しつつ、同時に固有性を超えた文化における普遍性とは何か、を探求して文化の本質を明らかにすることを課題として、本部門では文化生成のメカニズムの析出と文化創造への提言を進めている。

文化連関部門 ————— 文化はひとたび生まれると、その時代や空間を超えて移動し、交わることによって相互の文化は異なった要素を組み込んだ文化としての生命をもつ。こうした異文化接触によって人類の文明は形成されてきた。

そして、21世紀に入って更に加速化してきたグローバリゼーションの浸透によって、経済や政治そして情報は世界的な同時性をもって動き、社会も連動性をもって推移しているように見える。しかしながら、そこでは連動性と共に地域的な生活様式や文化における固有性を保持しようとするベクトルもまた作用している事態も看過することはできない。こうした文化の流動性と持続性とのせめぎ合いの中に現れる異文化間交渉のあり方は、時代に応じて大きく変容してきたものであり、長いタイムスパンの中でその実相を解明していかなければ、眼前の趨勢をも見誤ることになりかねない。

本部門では、文化生成部門の成果を踏まえ、異文化間接触で生じる事態の考察を通じて、グローバル化時代における学知のあり方を探求している。

文化表象部門 ————— 継続性と広域性を兼ね備えた東アジアの文化体系について、時間と空間の両面に関わる文化の実相を、文献研究と実地調査の二重証拠法により総合的に研究する。人間の創造した文化は、そのエッセンスをなす部分が後世に伝えられるに際し、文学や思想などのように文字を介するもののほか、文字以外の形態によって受け伝えられる分野も相当の割合を占めている。しかも文字を介した文化伝承の場合に比べ、それ以外の媒体で伝承される文化については、その中に込められた思考や価値観を抽出することは容易ではなく、それぞれの分野ごとに独自の方法を用意する必要がある。

本部門では、主たる対象を中国を中心とする東アジア文化圏に定め、考古文物、出土文献、科学技術、図像芸術、礼制習俗など五つの分野に重点を置いて研究対象の歴史の変遷を記述するばかりでなく、形象化して表出された文化の諸要素が、東アジア文化圏のなかで如何なる位置を占め、如何なる機能を果たしてきたのかについても探求する。

文化構成部門 ————— 本部門は、文化表象部門との協同のもとに、おもに中国を中心とする東アジア地域を対象として、その文化体系の全体像を解明する研究の一翼を担う。文化表象部門が非言語的な文化現象を手がかりに文化観念の側面にまで分析を進めるのとは対照的に、本部門ではまず言語を通じて表出される文化営為に着目して、言語史、宗教史、思想史、制度史、新学史など五つの分野から文化意識の形成を時系列的に追究していくとともに、その文化意識の表出としての文化現象にまで考察の対象を広げることによって、意識から表象へというベクトルに沿いながら、文化体系の深層から表層にいたる成り立ちを構造と動態の両面から複合的に解明する。

さらに言語史、制度史の分野では、漢字情報研究センターに協力して全国漢籍データベース、人文科学研究所蔵拓本データベースなどの構築を進める。また新学史分野は現代中国研究センターとともに、人文学とくに歴史学の視角から現代中国の深層構造を分析する。

共同研究

世界の注目を集める共同研究は、本研究所に始まった。現在26の研究班があり、3年から5年を1サイクルとして、毎週または隔週に開かれている。

【2008年度共同研究班】 *印は毎週、その他は隔週

曜日	課題	班長	場所
月	虚構と擬制——総合的フィクション研究の試み	大浦康介教授	本館セミナー室 2
	西陲發現中國中世寫本研究	高田時雄教授	分館会議室
	外から見た近代日本の記録	VITA, Silvio 客員教授	本館セミナー室 3
	第一次世界大戦の総合的研究に向けて	山室信一教授、岡田暁生准教授	本館セミナー室 4
	中国絵画の総合的研究	曾布川寛教授	分館会議室
	複数文化接触領域の人文学	田中雅一教授	本館セミナー室 3
	北朝石刻資料の研究*	井波陵一教授	分館会議室
火	陰陽五行のサイエンス	武田時昌教授	分館応接室・会議室
	元代の法制	岩井茂樹教授	分館会議室
	中国古鏡の研究*	岡村秀典教授	分館会議室・考古学研究室
	伝統中国の生活空間	田中 淡教授	分館会議室
	唐代文学の研究	金 文京教授	本館セミナー室
	東アジア古典文献コーパスの研究	安岡孝一准教授	分館応接室
水	三教交渉の研究 (2)	麥谷邦夫教授	分館会議室
金	移民の近代史——東アジアにおける人の移動	水野直樹教授	本館セミナー室 3
	王権と儀礼	藤井正人教授	本館セミナー室 3
	漢簡語彙の研究*	冨谷 至教授	分館会議室
	銀雀山漢墓竹書残簡の整理——中国古代の基礎史料*	浅原達郎教授	
	近代古都研究	高木博志准教授	本館セミナー室
	啓蒙の運命——系譜学の試み	富永茂樹教授	本館セミナー室 2
	古典を通じた近代アジア史の研究	籠谷直人教授	本館セミナー室
	人種の表象と表現をめぐる学際的研究	竹沢泰子教授	本館セミナー室 2
	真諦三蔵とその時代	船山 徹教授	分館会議室・本館セミナー室
	人文研探検	菊地 暁助教、岩城卓二准教授	本館セミナー室 2
	中国社会主義文化の研究	石川禎浩准教授	本館セミナー室 4
長江流域社会の歴史景観	森 時彦教授	分館会議室	

東方学研究部の前身である東方文化学院京都研究所は、中国文化の真髄を理解するための純学問的研究をめざして設立された。昭和初期、日中関係の悪化をはじめ、周囲の状況がそれと逆行してゆくなかで、時流に流されぬ学問的遺産が蓄積されていったのは、先学所員たちのなみなみならぬ努力の賜物であった。

ここではまず、基礎的な文献資料の収集と整理、その校訂と一部は索引作成などが着手され、それらを土台として重要文献の会読がなされた。ここでいう会読とは複数の専門家による高い水準の共同研究にほかならず、その過程において論文や研究報告がものされ、会読の結果、校訂と訳注が生まれ、場合によって索引が作られる。現在の東方学研究部の共同研究班の多くは、こうした原典会読方式のうえにたち、自由討論を加えるスタイルをとっている。

共同研究の会読方式のほかに、東方学研究部の研究体制のいまひとつの特色として共同研究室がある。東方文化学院の初期においては、所員はあらかじめ認められた研究題目に従って、3年ごとに研究報告を提出し、所長、評議員(指導員)の審査をうけて公刊する個人研究が中心であった。しかし、経学文学、歴史、宗教、考古美術、天文暦算、歴史地理の6研究室において、それぞれの分野での会読が定着してゆくと、その効率的な推進のためにも研究室の果す役割が増大していった。こうして1938年の東方文化研究所改組以後は、個人研究の指導員制度をやめ、研究室単位の研究体制に比重がうつる。

現在でも各共同研究室には関係文献や工具書類が常備されていて、東方学研究部共同研究班のいわば根拠地となっている。会読を軸とした共同研究は正式には1935年から、経学文学と天文暦算の研究室ではじまった。前者の成果は『尚書正義定本』に、後者は『漢書律暦志の研究』として世に問われた。経学文学研究室ではほかに元代の戯曲である「元曲」の研究を進め、さらに戦後には長い歳月をかけて全12冊におよぶ『唐代研究のしおり』を刊行する一方、白居易、李商隠などいくつかの作品を会読してきた。のちに科学史と改称された天文暦算研究室の活動は戦後とくに盛んで、『天工開物』の研究をはじめ、時代時代の重要文献を会読しつつ数冊の中国科学技術史の論文集をまとめた。近年では、新発見の出土資料を使った中国医学の研究が行なわれた。

歴史研究室では殷代甲骨文字、難解な元代の法典・行政文書集『元典章』、膨大な量の清代の『雍正硃批諭旨』などの会読と研究が行なわれてきた。また旧現代中国部門

の設置以来、五四運動から毛沢東時代まで研究の幅を広げている。歴史地理は『水経注』の研究のほか、居延漢簡、石刻資料、都市研究などを手がけ、宗教では六朝から唐代に重点をおき、儒・仏・道教それぞれの専門知識を必要とする難解な諸文献を解説しつつ、『肇論研究』などをまとめてきた。考古美術が中国・ガンダーラ仏教寺院の調査とともに中国出土文物の先端的研究を行なっていることは広く知られるところであろう。

1949年の統合のあと、旧日本部と旧西洋部はそれぞれ一部一班のかたちで共同研究をスタートした。日本部柏祐賢の「日本の近代化」班と西洋部桑原武夫の「ルソー研究」班がそれである。この日本近代と18世紀フランスは、今日でも依然として両部の主要な研究対象としてとりあげられている。共同研究は所員を中心に所外の専門研究者の協力をえて、3年のサイクルで成果をまとめてゆく方式のもので、つぎつぎと目ざましい業績がだされたこともあって、人文科学研究所といえば共同研究、というイメージを人びとにうえつけた。専門の枠にとらわれず、自由な共同討議を通じて新しい問題をほりおこす方法は、人文科学の共同研究のあり方のひとつのモデルともなったのである。やがて旧日本部は、思想・文化に重点をおく通称「意識」班と、経済・社会をとりあげる「機構」班にわかれ、それぞれ明治維新、米騒動を研究して報告書をあらわした。一方旧西洋部も、しだいに研究領域をひろげ、社会人類学などの部門を増設して内容を多彩にしてゆく。

こうして1969年までに、両部とも思想、文化、社会の三部門ずつをそろえ、旧日本部では江戸時代末期の文化や現代の家族問題、旧西洋部では中世社会史や20世紀の政治史などの共同研究班も組織されるようになった。1981年度から外国人客員部門として増設された比較社会部門及び1985年度増設の日本学部門は、各国の研究者たちが直接本所の共同研究に一定期間、しかも継続的に参加できる道をひらいた。



出版物・著作

人文科学研究所の出版物は、定期的に刊行される「紀要」および『東洋学文献類目』と不定期に出版される研究報告に分けられる。「紀要」には、邦文の『東方学報』『人文学報』と、欧文の『ZINBUN』がある。1931年に創刊された『東方学報』は、毎年1冊以上発行され、現在82冊に至っている。東方学研究部所員と共同研究班員の論文を掲載し、日本の東洋学界を代表する雑誌のひとつとあってよいだろう。旧人文からは戦前に『東亜人文学報』、戦後は『人文科学』が刊行されていた。1950年以降、旧日本部と旧西洋部所員や共同研究班員の研究発表誌として『人文学報』が発行されており、現在までに97号を数える。また、1975年より欧文紀要『ZINBUN』が加えられ、両部所員等が交代で執筆し、現在40冊に達している。『東洋学文献類目』は1935年に始まる『東洋史研究文献類目』を1966年に改称したもので、各年度ごとの日本、中国、欧米の東洋学関係の論文と研究書を網羅した目録である。本書は内外の学界から需要が多く、2008年までに既刊58冊を数え、1981年度以降はウェブサイト上で公開されている。

不定期刊行物としては、所員の個人研究と共同研究班の研究報告があり、旧東方文化研究所以来刊行された報告書の数は約180にのぼる。このほか、イラン・アフガニスタン・パキスタンの学術調査報告や、38冊に及ぶ内外調査の報告書がある。

人文科学研究所研究報告書

近代京都研究 (思文閣出版)	2008	丸山 宏・伊従 勉・高木博志 編	三教交渉論叢	2005	麥谷邦夫 編
敦煌寫本研究年報 第二號	2008	高田時雄 編	中國文明の形成 (朋友書店)	2005	小南一郎 編
滿州——記憶と歴史 (京都大学学術出版会)	2007	山本有造 編	身体論のすすめ (丸善株式会社)	2005	菊地 暁 編
敦煌寫本研究年報 創刊號	2007	高田時雄 編	人種概念の普遍性を問う——西洋的パラダイムを超えて (人文書院)	2005	竹沢泰子 編
元刊雜劇の研究——三奪槩・気英布・西蜀夢・単刀会 (汲古書院)	2007	金 文京 ほか 共著	明治維新期の政治文化 (思文閣出版)	2005	佐々木克 編
中國宗教文献研究	2007	京都大學人文科学研究所 編	国家形成の比較研究 (学生社)	2005	前川和也・岡村秀典 編
中國美術の圖像學	2006	曾布川 寛 編	中国近世社会の秩序形成	2004	岩井茂樹 編
ミクロ人類学の実践——エイジェンシー/ネットワーク/身体 (世界思想社)	2006	田中雅一・松田素二 編	中国近代化の動態構造	2004	森 時彦 編
江陵張家山二四七號墓出土漢律令の研究 (朋友書店)	2006	富谷 至 編	魏晋石刻資料選注	2004	井波陵一 編
日仏交感の近代——文学・美術・音楽 (京都大学学術出版会)	2006	宇佐美 斉 編著	中国古代造園史料集成——増補 哲匠録 豊山篇 秦漢—六朝 (中央公論美術出版)	2003	田中 淡・外村 中・福田美穂 編
雲岡石窟 遺物篇 (朋友書店)	2006	岡村秀典 編	周氏冥通記研究 (譯注篇)	2003	麥谷邦夫・吉川忠夫 編
			変異するダーウィニズム——進化論と社会 (京都大学学術出版会)	2003	阪上 孝 編
			帝国の研究——原理・類型・関係 (名古屋大学出版会)	2003	山本有造 編

人文科学研究所の個人研究と共同研究の成果は、多くの新知見に満ちた著作として公刊され、人文学の発展と普及に貢献している。共同研究班による成果は、論集としてまとめられることが多いのに対し、個人研究の成果は、単刊の学術書のほか、個別のテーマをさらに掘り下げ、一般読者向けにわかりやすく解説した書物として刊行されるものも少なくない。どちらも新たに拓かれた知の地平を社会に還元し、共有して行くうえで、重要な役割を担っている。



丸山 宏・伊從 勉・高木博志(編)
『近代京都研究』
思文閣出版 2008年8月

本書は、丸山宏・客員教授を班長とする「近代京都研究」班(2003~2005年度)の共同研究の成果である。「近代の歴史都市としての京都」について、特殊性と普遍性を射程に入れ、歴史学・建築学・美術史・造園史・地理学などから総合的に論じている。姉妹編として『京都新聞』での連載にもとづく一般向けの読みもの『みやこの近代』(思文閣出版)がある。



岡田暁生(著)
『西洋音楽史——「クラシック」の黄昏』
中公新書 2005年10月

18世紀後半から20世紀前半にいたる西洋音楽史は、芸術音楽と娯楽音楽の分裂のプロセスであり、この時期の音楽が一般に「クラシック音楽」と呼ばれている。本書は「クラシック音楽」の歴史と、その前史である中世、ルネサンス、バロックで何が用意されたのか、そして「クラシック後」には何がどう変質したのかを大胆に位置づける試みである。



安岡孝一・安岡素子(著)
『キーボード配列 QWERTYの謎』
NTT出版 2008年3月

タイプライターの QWERTY 配列は、どのようにして決まり、どのように普及した結果コンピュータのキーボードに採り入れられたのだろうか。そして「タイピストがなるべく打ちにくいようなキー配列」なんていうガセネタを最初に流したのは誰で、このガセネタはどう広まっていったのか。本書はこれらを明らかにすべく、1840年代から1980年代まで、約140年間にわたる歴史の旅をする。



金文京(著)
『三国志の世界——後漢 三国時代』
講談社 2005年1月

流浪の英雄、蜀の劉備。中国詩文に一時代を画した魏王・曹操。老獪な現実主義者、呉の孫権。そして朝鮮半島・邪馬台国をめぐる国際関係。小説『三国志演義』を手がかりにしつつも三国の鼎立には呉がキャストボードを握っていたことを重視して、演義の影響を鮮やかに反転させる手法で歴史を描く。東アジアの戦乱と外交を解き明かし、華麗なる大抗争の実像に迫る。



富谷 至(編著)
『東アジアの死刑』
京都大学学術出版会 2008年2月

究極の刑罰、死刑に焦点をあて、東アジア世界の法制度、法習慣、法思想、法社会学、法と宗教を総合的に考究した論集。日本・中国・オランダ・スウェーデン・イギリスの、歴史学・法学・社会学・人類学からなる国際共同研究の成果である。罪と罰の法意識を学際的かつ実証的に研究した諸論は、死刑問題の根源、今日の社会問題の解明に貢献する。



山室信一(著)
『キメラ——満洲国の肖像』(増補版)
中公新書 2004年7月

1932年3月、中国東北地方に忽然と出現し、わずか13年5ヵ月後に姿を消した国家、満洲国。本書は建国の背景、国家理念、統治機構の特色を明らかにし、そこに凝縮して現れた近代日本の国家観、民族観、そしてアジア観を問い直す試みである。新たに満洲・満洲国の前史と戦後に及ぼした影響など、その歴史的意義を想定問答形式によって概観する章を増補した。

本研究所の蔵書は2008年3月31日現在約55.6万冊、そのうち人文学研究部・東方学研究部の和書・洋書が本館に、東方学研究部の漢籍・中国書が分館（附属漢字情報研究センター）に所蔵されている。これまでの共同研究とのかかわりで人文学研究部には明治維新、第一次世界大戦後の社会・労働問題、第二次世界大戦期の諸問題や家族問題関係の書籍が多く、18-19世紀のフランス文献も集まっている。最近では、近代日本と東アジアに関わる文献、明治初期の西欧人の日本見聞記や万国博覧会関係の図録集などの収集等にも注意が向けられている。東方学研究部のものは旧東方文化研究所と旧人文科学研究所の漢籍が主軸で、旧中国関係の文献の収蔵では世界有数の質量を誇る。民国時代の蔵書家陶湘氏の旧蔵漢籍約28,000冊を中核とし、とくに叢書が完備している。研究に直接役立つことを指標に、貴重書よりも信頼できる版本を網羅的に補充する方針がとられ、1948年には漢籍総数97,000冊に達した。統合により旧人文科学研究所の漢籍47,000冊を加え、その後も鋭意充実に努めている。

文庫として、村本文庫、中江文庫、矢野文庫、松本文庫、内藤文庫、サン＝シモン・フーリエ文庫、桑原文庫、河野文庫、田中文庫、安文庫等がある。本研究所の2008年3月現在の蔵書数は、和書147,462冊、中国書326,818冊、洋書81,734冊、合計556,014冊であり、また逐次刊行物の所蔵タイトル数は、和文2,509種、中文2,774種、朝鮮・韓国文122種、欧文807種である。

図書の整理（分類）は和洋書および主として辛亥革命以後の中国書については日本十進分類法により、漢籍を中心とする蔵書は、経学・史学・諸子・詩文の書籍をそれぞれ収める経・史・子・集の四部の他に、各部にわたる書籍を収める叢書部を加えた五部分類法によっている。

本図書室も国立情報学研究所の主管する「学術情報ネットワーク」に参加しており、1988年6月から受け入れた和洋書について、端末機により目録を作成し、同研究所「総合目録データベース」形成の一翼をになっている。また辛亥革命以後の中国書についても、2002年4月より同様に入力を開始した。

蔵書統計（年代別内訳）

年	和文	中国文	欧文	計(冊)
1955	22,837	58,974	1,201	83,012
1967	45,733	187,650	21,573	254,956
1975	64,167	214,231	31,866	310,264
1986	97,150	265,239	49,623	412,012
1995	122,470	293,732	65,838	482,040
2000	131,630	305,994	73,685	511,309
2005	140,973	317,451	78,081	536,505
2008	147,462	326,818	81,734	556,014

特殊文庫

村本文庫	村本英秀氏（元朝日新聞社員）旧蔵書	漢籍	8,484冊
中江文庫	中江丑吉氏旧蔵書	漢籍 洋書	6,037冊 728冊
松本文庫	松本文三郎氏（京都大学名誉教授）旧蔵書	和書 漢籍 洋書	3,389冊 6,471冊 1,069冊
内藤文庫	内藤虎次郎氏（京都大学名誉教授）旧蔵書	漢籍 和書 洋書	1,636冊 100冊 271冊
矢野文庫	矢野仁一氏（京都大学名誉教授）旧蔵書	和漢洋書	697冊
サン＝シモン・フーリエ文庫		洋書	211冊
桑原文庫	桑原武夫氏（京都大学名誉教授）旧蔵書	洋書	1,047冊
田中文庫	田中峰雄氏（甲南大学教授）旧蔵書	洋書	947冊
河野文庫	河野健二氏（京都大学名誉教授）旧蔵書	洋書	647冊
安文庫	安 秉珪氏（朝鮮史研究者）旧蔵書		1,161冊

人文科学研究所図書室利用規程

平成6年3月10日制定／平成12年1月27日改正／平成15年11月27日改正／平成20年12月11日改正

趣旨

第1条 京都大学人文科学研究所図書室（以下「図書室」という。）の利用は、この規程に定めるところによる。

図書資料

第2条 図書室に、次の図書その他の資料（以下「図書資料」という。）を置く。

- ①貴重書
- ②普通図書
- ③参考図書
- ④逐次刊行物
- ⑤視聴覚資料
- ⑥その他の資料

利用者

第3条 図書室を利用できる者（以下「利用者」という。）は、次の各号に掲げる者とする。

- ①本研究所の教職員
- ②本研究所の名誉教授及び名誉所員
- ③本研究所の元教職員、非常勤講師、非常勤教職員、招へい外国人学者、内地研究員、外国人共同研究者及びこれに準ずる者
- ④本研究所の共同研究班参加者、日本学術振興会特別研究員、研修員、研究生及びこれに準ずる者
- ⑤本研究所以外の本学教職員（名誉教授を含む）、日本学術振興会特別研究員、研修員、研究生及びこれに準ずる者
- ⑥本学の大学院生及び学生
- ⑦図書室の利用を申し出た学外者

開室時間

第4条 図書室の開室時間は、月曜日から金曜日までの午前9時から午後5時までとする。
2 所長が特に必要と認めるときは、前項に定める開室時間を変更することができる。

休室日

第5条 図書室の休室日は、次のとおりとする。
①土曜日及び日曜日
②国民の祝日に関する法律（昭和23年法律第178号。以下「祝日法」という。）に規定する休日
③本学創立記念日（6月18日）
④本研究所創立記念行事開催日
⑤8月1日から8月15日
⑥12月26日から1月5日
⑦毎月末日（末日が土曜日、日曜日又は祝日法に規定する休日に当たるときは、次の開室日）
2 所長が特に必要と認めるときは、臨時に休室又は開室することができる。

利用方法

第6条 図書室利用の方法は、次のとおりとする。
①閲覧
②貸出
③書庫内検索
④参考調査

閲覧

第7条 閲覧は、所定の場所で行うものとする。
第8条 利用者は、次のとおり図書資料を閲覧することができる。ただし、試験期間中において閲覧室が非常に混雑している等、本研究所の教育・研究に支障をきたす恐れがある場合においては、図書資料の閲覧利用を制限することができる。

①開架図書は、閲覧室で自由に閲覧することができる。

②書庫内図書及び視聴覚資料については、所定の手続きを経て所定の場所で閲覧することができる。

2次の各号に掲げる場合においては、閲覧を制限することができる。

- ①図書資料に独立行政法人等の保有する情報の公開に関する法律（平成13年法律第140号。以下「情報公開法」という。）第5条第1号、第2号及び第4号イに掲げる情報が記録されていると認められる場合（当該情報が記録されている部分に限る。）
- ②図書資料の全部又は一部を一定の期間公にしないことを条件に個人又は情報公開法第5条第2号に規定する法人等から寄贈又は寄託を受けている場合（当該期間が経過するまでの間に限る。）
- ③図書資料の原本を利用させることにより当該原本の破損若しくはその汚損を生じる恐れがある場合又は当該資料が現に使用されている場合

貸出

第9条 第3条第1号から第6号に掲げる者は、図書資料の貸出を受けることができる。ただし、次の各号に掲げる図書資料の貸出は行わない。

- ①貴重書
- ②事典、辞書及び目録類の参考図書
- ③視聴覚資料
- ④その他所長が特に指定したもの

貸出の手続き

第10条 貸出（一時帯出を含む）を希望する者は、職員証又は学生証その他所属、身分を証明するもの（以下「身分証」という。）を提示し、所定の手続きを経なければならない。

貸出期間及び冊数

第11条 図書資料の貸出期間及び冊数は、次のとおりとする。

- ①本研究所の教職員
2年以内 400冊以内
 - ②本研究所の名誉教授及び名誉所員
1年以内 30冊以内
 - ③本研究所の元教職員、非常勤講師、非常勤教職員、招へい外国人学者、内地研究員、外国人共同研究者、共同研究班参加者、日本学術振興会特別研究員、研修員、研究生及びこれに準ずる者
1月以内 30冊以内
 - ④本研究所以外の本学教職員（名誉教授を含む）、日本学術振興会特別研究員、研修員、研究生及びこれに準ずる者
1月以内 5冊以内
 - ⑤本学の大学院生、学生
2週間以内 5冊以内
- 2 第3条第1号に掲げる者への雑誌（製本・未製本）の貸出期間は、次の開室日までとする。
- 3 第3条第2号から第6号に掲げる者への雑誌（製本・未製本）の貸出期間は、その日に限り一時帯出することができる。
- 4 所長が特に必要と認めるときは、貸出期間及び冊数を変更することができる。

転貸の禁止

第12条 利用者は、貸出中の図書資料を他の者に転貸してはならない。

研究室貸出

第13条 研究室貸出については別途定める。

返却

第14条 貸出を受けた図書資料は、貸出期間内に返却しなければならない。
2 利用者は、貸出期間内であってもその利用資格を失ったときは、ただちに借用している図書資料を返却しなければならない。
3 所長が特に必要と認めるときは、貸出中の図書資料の返却を求めることがある。

書庫内検索

第15条 書庫内検索は、第3条第1号から第5号に掲げるものおよび本学の大学院生にあっては、掛員に身分証を提示して入庫することができる。
2 本研究所の共同研究班参加者については、班長の許可のもとに「図書室利用証」を発行し、身分証に代えるものとする。

参考調査

第16条 利用者は、教育又は研究を目的とする場合に限り、所定の手続きにより学術に係る調査及び情報の提供を依頼することができる。
2 前項の調査を求められた場合において、特に経費又は時間を要し、他の業務に支障のきたす恐れのある調査については、回答を行わない。

事故の届出及び処置

第17条 利用者は、利用している図書資料に汚損、破損又は紛失等の事故を生じさせたときは、ただちにその旨を所長に届け出なければならない。
2 所長は、前項の事故を生じさせた利用者に対し弁償を求めることができる。

利用の停止

第18条 この規程に違反した者には、図書室の利用を停止することができる。

雑則

第19条 利用者の閲覧に供するため、図書資料の目録及びこの規程を常時閲覧室に備え付けるものとする。
第20条 この規程に定めるもののほか、規程の実施に関し必要な事項は、所長が定める。

附則（平成6年3月10日制定）

1 この規程は、平成6年4月1日から施行する。
2 京都大学人文科学研究所図書・資料取扱規程（昭和25年6月8日制定）は廃止する。

附則（平成12年1月27日制定）

1 この規程は、平成12年4月1日から施行する。
2 本研究所附属漢字情報研究センター図書資料の利用は、京都大学人文科学研究所附属漢字情報研究センター利用規程による。

附則（平成15年11月27日制定）

この規程は、平成16年4月1日から施行する。

附則（平成20年12月11日改正）

この規程は、平成21年1月1日から施行する。

人文科学研究協会

本協会の前身である東方文化研究援護会は、1946年3月、東方文化研究所長、羽田亨氏によって設立され、「東洋における人文科学研究」の助成を主たる目的として事業を行っていた。1949年1月、東方文化研究所は、「世界文化に関する人文科学の総合研究」を設置目的とする京都大学人文科学研究所に統合されることとなり、東方文化研究援護会もまた、より広い範囲の人文科学研究の奨励助成を目的とする必要が生じ、変更手続きをすすめ、1962年11月に財団法人「人文科学研究協会」が認可され発足した。

本協会は、したがってその目的を「広く人文科学の研究を奨励助成し、もって学術および文化の発展に寄与すること」（寄附行為第3条）とし、事業所を京都大学人文科学研究所内に置き、以下の事業を行っている（同第4条）。

- ①人文科学に関する研究を行う者に対する助成
- ②人文科学に関する研究機関に対する援助
- ③人文科学に関する文献の刊行及び刊行費の補助
- ④人文科学に関する学術講演会の開催及び補助
- ⑤その他前条の目的を達成するために必要な事業

特に①については、1965年より毎年、在野の研究者を対象とする人文科学研究奨励賞（2006年より人文科学研究協会賞）を選考、授与し（賞金30万円）、斯学の発展を図っている。初代理事長は、当時の京都大学総長平沢興氏、常任理事は人文科学研究所長の桑原武夫氏であった。その後、理事長には歴代の元所長が、常任理事には現職所長がその任にあたり、今日に至っている。

おもな事業（2005年度以降）

研究者助成 海外出張者への国際交流活動推進費補助／パリ渡航1件	2008.7.26	表智之 京都精華大学研究員 「マンガをウラから読んでみる——マンガ分析学入門」
	2008.7.26	北原恵 大阪大学大学院文学研究科准教授 「“真実らしさ”はいかに作られるか——映像分析入門」
文献刊行及び刊行費への補助 『東方学報』3冊、『東洋学文献類目』2冊、「夏期公開講座講演集」市販本出版補助1冊／『記念日の創造』	2008.10.16	下垣仁志 立命館大学講師 「ガンダーラの寺院と仏教」
	2008.10.16	菱田哲郎 京都府立大学准教授 「アンコールワットを掘る」
学術講演会の開催及び補助 夏期公開講座、通算8日間 学術講演会	2008.11.18	小坂圭太 お茶の水女子大学准教授 「第一次世界大戦のあと」
2005.7.20 朱岩石 中国社会科学院考古研究所 「鄴城における仏教寺院址の発掘調査」		
2005.10.21 Olivier Bivort トリエステ大学 「ヴェルレーヌの「詩法」をめぐる」		
2006.4.25 北住淳 愛知県立芸術大学 「フランツ・リストと超絶技巧の美学」		
2006.6.27 渡邊晶（財）竹中大工道具館学芸部長 「東アジアの木造建築と道具——ユーラシア大陸東西の比較を含めて」		
2007.7.14 井野瀬久美恵 甲南大学 「事件は帝国から降ってくる——シャーロック・ホームズの推理」		
		人文科学研究奨励賞（2006年度より人文科学研究協会賞に改称）
	2005.11.4	原田禹雄氏 元国立療養所邑久光明園長 「琉球と中国の交流史研究」に対して
	2006.11.2	片山社秀氏 批評家 「戦前日本の作曲界の研究」に対して
	2007.11.15	長野仁氏 鍼灸師 「鍼灸師の古医書研究」に対して
	2008.11.20	日中藝術研究会（代表 三山陵氏） 「中国近代の版画を中心とする民間美術の研究、資料収集と当該分野における日中学術交流に対する貢献」に対して

研究者一覽

(職階ごとの50音順)

【凡例】

- ① 学位(取得大学)
- ② 専門分野
- ③ 個人研究のテーマ、もしくは最近の研究領域
- ④ 学内での講義科目の1例。題目のあとに(研究科/学部名)
- ⑤ 主な出版物あるいは論文1点、ことわりのないものは単著

教授



あさはら たつろう
浅原達郎
文化表象部門

- ① 文学修士(京都大学)
- ② 東洋史
- ③ 先秦時代の金文
- ④ 中国古代の暦(全学共通科目)
- ⑤ 『読上海博物館藏楚簡札記序』『日古』8 2007年



おかむら ひでのり
岡村秀典
文化表象部門

- ① 文学博士(京都大学)
- ② 中国考古学
- ③ 古代中国の考古学的研究
- ④ 漢鏡の研究(文学研究科/文学部共通)
- ⑤ 『夏王朝——中国文明の原像』講談社学術文庫 2007年



い なみ りょういち
井波陵一
漢字情報研究センター

- ① 文学修士(京都大学)
- ② 中国文学
- ③ 清代の文化と社会
- ④ 王国維『人間詞話』(文学研究科)
- ⑤ 『紅樓夢と王国維——二つの星をめぐって』朋友書店 2008年



かごたに なおと
籠谷直人
文化連関部門

- ① 経済学博士(大阪市立大学)
- ② 日本経済史
- ③ 戦前期日本の工業化と華僑ネットワーク
- ④ 日本貿易論(経済学研究科)
- ⑤ 『アジア国際通商秩序と近代日本』名古屋大学出版会 2000年



いわい しげき
岩井茂樹
文化構成部門/現代中国研究センター(兼任)

- ① 文学博士(京都大学)
- ② 中国近世史、東アジア関係史
- ③ 13世紀~20世紀中国の財政史研究、中国近世の法制と裁判文書研究、東アジアの朝貢と互市の研究
- ④ 17世紀東アジアにおける儀礼と通商(文学研究科)
- ⑤ 『中国近世財政史の研究』京都大学学術出版会 2004年



きん ぶんきょう
金文京
文化構成部門

- ① 文学修士(京都大学)
- ② 中国文学
- ③ 中国近世戯曲・小説
- ④ 敦煌変文講読(文学研究科)
- ⑤ 『元刊雜劇の研究——三奪槩・気英布・西蜀夢・半刀会』(共著)汲古書院 2007年



おおoura やすhide
大浦康介
文化生成部門

- ① 第3課程博士(パリ第7大学)
- ② 文学・表象理論
- ③ 性表象の研究、虚構性の研究
- ④ 性表象と文学——「猥褻裁判」と倫理問題(文学研究科/文学部共通)
- ⑤ 『ボルノグラフィーにおける言葉と身体』吉田城他編『身体フランス文学』京都大学学術出版会 2006年



そぶ かわ ひろし
曾布川寛
文化表象部門

- ① 文学修士(京都大学)
- ② 中国美術史
- ③ 中国美術の様式と意味
- ④ 中国絵画の研究(文学研究科/文学部共通)
- ⑤ 『中国美術の図像と様式』中央公論美術出版 2006年



たか たときお
高田時雄
文化構成部門

- ① Ph. D. (EHESS, Paris)、文学博士(京都大学)
- ② 言語史、敦煌学
- ③ 敦煌写本の言語史的研究
- ④ ヨーロッパにおける中国語研究の歴史(文学研究科)
- ⑤ 『敦煌・民族・言語』北京:中華書局 2005年



た なかまさかず
田中雅一
文化研究創生部門/人文学国際研究センター(兼任)

- ① Ph. D. (ロンドン大学)
- ② 文化人類学・南アジア民族誌
- ③ セクシュアリティ・暴力・宗教、軍隊
- ④ 文化行為論(人間・環境学研究科/総合人間学部共通)
- ⑤ 『フェティシズム研究』全3巻(編著)京都大学学術出版会 2009~2010年



たけがわやすこ
竹沢泰子
文化連関部門

- ① Ph. D. (ワシントン大学)
- ② 文化人類学 アメリカ研究
- ③ 現代アメリカ合衆国の人種アイデンティティ
- ④ 社会学特別講義(人種・エスニシティ論)(文学研究科)
- ⑤ 『人種概念の普遍性を問う——西洋的パラダイムを超えて』(編著)人文書院 2005年



とみながしげき
富永茂樹
文化生成部門

- ① 文学博士(京都大学)
- ② 知識社会学
- ③ フランス革命と近代的主体の成立
- ④ トクヴィル・モメント(3)——切断と連続(文学研究科/文学部/教育学部共通)
- ⑤ 『理性の使用——ひとはいかにして市民となるのか』みすず書房 2005年



たけだときまさ
武田時昌
漢字情報研究センター

- ① 文学修士(京都大学)
- ② 中国科学史・科学思想史
- ③ 中国伝統科学の思想史的考察
- ④ 中国における自然哲学の理論形成(文学研究科/文学部共通)
- ⑤ The Formation of the Study of Shushu 術數 and its Development in the Middle Ages: A Tentative Study of a Field of Scientific Study Peculiar to East Asia, *HISTORIA SCIENTIARUM*, 17-3, 2008



とみやいたる
富谷至
文化構成部門

- ① 文学博士(京都大学)
- ② 中国法制史、簡牘学
- ③ 魏晋南北朝刑罰制度の研究
- ④ 簡牘研究(文学研究科/文学部共通)
- ⑤ 『東アジアの死刑』京都大学学術出版会 2008年



た なか たん
田中 淡
文化表象部門

- ① 工学博士(東京大学)
- ② 中国建築史・造園史
- ③ 中国建築の様式・技法・空間
- ④ 東洋建築史論(人間・環境学研究科/総合人間学部共通)
- ⑤ 『中国建築史の研究』弘文堂 1989年



ふじいまさと
藤井正人
文化研究創成部門

- ① Ph. D. (ヘルシンキ大学)
- ② インド学、サンスクリット文献学
- ③ ヴェーダ文献の生成と伝承の研究
- ④ ヴェーダ祭式入門(文学研究科/文学部共通)
- ⑤ The Brahman Priest in the History of Vedic Texts, *Studia Orientalia* 94, 2001.



みずの なおき
水野直樹
文化連関部門

- ① 文学博士 (京都大学)
- ② 朝鮮近代史・東アジア関係史
- ③ 植民地期朝鮮の支配政策と朝鮮社会の対応
- ④ 在外朝鮮人の近現代史 (文学研究科)
- ⑤ 『創氏改名——日本の朝鮮支配の中で』 岩波新書 2008年



やまむろしんいち
山室信一
文化連関部門教授

- ① 法学博士 (京都大学)
- ② 近代法政思想史
- ③ 戦争と平和をめぐる法政思想の連鎖研究
- ④ 第一次世界大戦と現代社会
- ⑤ 『憲法9条の思想水脈』 朝日新聞出版 2007年



むぎたにくに お
菱谷邦夫
文化構成部門

- ① 文学修士 (東京大学)
- ② 中国思想
- ③ 道教思想
- ④ 道教思想資料 (文学研究科/文学部共通)
- ⑤ 『三教交渉論叢』 (編著) 京都大学人文科学研究所 2005年



よこやまとし お
横山俊夫
文化研究創成部門/大学院地球環境学堂 (両任)

- ① 哲学博士 (オックスフォード大学)
- ② 文明学、前近代日本文明史
- ③ 18、19世紀日本の日用百科書による礼法伝播の研究
- ④ 地球文明論 (大学院地球環境学舎)
- ⑤ *Even a sardine's head becomes holy: the role of household encyclopedias in sustaining civilisation in pre-industrial Japan, Sansai 1, Kyoto, 2006.*



もり ときひこ
森時彦
文化構成部門/現代中国研究センター (兼任)

- ① 文学博士 (京都大学)
- ② 中国近現代史
- ③ 近代中国の綿紡績業
- ④ 長江流域社会の研究 (文学研究科/文学部共通)
- ⑤ 『中国近代化の動態構造』 (編著) 京都大学人文科学研究所 2004年

准教授



いけだ たくみ
池田 巧
文化構成部門/現代中国研究センター (兼任)

- ① 文学修士 (東京大学)
- ② シナ・チベット語方言史
- ③ 川西走廊の漢藏諸語の記述研究
- ④ 現代中国語の構造 (文学研究科/文学部共通)
- ⑤ 『活きている文化遺産デルゲバルカン——チベット大蔵経木版印刷所の歴史と現在』 (共著) 明石書店 2003年



いしかわよしひろ
石川禎浩
現代中国研究センター

- ① 文学博士 (京都大学)
- ② 中国近現代史
- ③ 中国共産党史の研究
- ④ 近現代中国におけるナショナリズム、および政治的正統性のイメージ形成 (文学研究科/文学部共通)
- ⑤ 『中国共産党成立史』 岩波書店 2001年



いとうじゅんじ
伊藤 順二
文化連関部門

- ① 文学博士 (京都大学)
- ② コーカサス近代史
- ③ 露土戦争とグルジア社会
- ④ コーカサス近代史と義賊／匪賊 (文学研究科／文学部共通)
- ⑤ 『コーカサスを知るための60章』 (共著) 明石書店 2006年



えん こうせん
袁 広泉
現代中国研究センター

- ① 学術博士 (神戸大学)
- ② 中国近現代史
- ③ 中国現代教育史
- ④ なし
- ⑤ 『定県における農村医療制度創出の実験』『歴史研究』36 1999年



いなば みおる
稲葉 穰
文化表象部門／人文学国際研究センター (兼任)

- ① 文学修士 (京都大学)
- ② 中央アジア史・東西交渉史
- ③ イスラーム東漸史の研究
- ④ 初期イスラーム時代アフガニスタン史研究 (文学研究科／文学部共通)
- ⑤ 『南アジア史2』 (共著) 山川出版社 2007年



おうしけんた
王寺 賢太
文化生成部門

- ① 文学修士 (東京大学)
- ② フランス文学・思想／社会思想史
- ③ フランス18世紀の歴史叙述と政治・経済思想
- ④ ルソー『学問芸術論』と同時代のジャーナリズム (文学研究科／文学部共通)
- ⑤ *Civilisation et naissance de l'histoire mondiale dans l'Histoire des deux Indes*, in *Revue de synthèse* 2008/1, pp. 57-83.



いわきたくじ
岩城 卓二
文化生成部門

- ① 文学博士 (関西大学)
- ② 日本近世史
- ③ 幕末社会論
- ④ なし
- ⑤ 『近世畿内・近国支配の構造』柏書房 2006年



おかだあけお
岡田 暁生
文化研究創成部門

- ① 文学博士 (大阪大学)
- ② 西洋音楽史
- ③ 第一次大戦と音楽史
- ④ 音楽批評家としてのアドルノ (文学研究科)
- ⑤ 『恋愛哲学者モーツァルト』新潮選書 2008年



ウィッターレン クリスティアン
WITTERN, Christian
漢学情報研究センター

- ① 哲学博士 (Ph. D.) (ゲッティンゲン大学)
- ② 人文情報学、中国禅仏教
- ③ 仏教研究知識ベース —— 禅仏教を例として
- ④ 東アジア人文情報学 (人間・環境学研究科)
- ⑤ *Entrance Through the Scriptures: Catalogues and Electronic Text as a New Gate to the Buddhist Tradition*, 中華佛學學報第20期, 2007, pp. 413-429



かとうかずと
加藤 和人
文化研究創成部門

- ① 理学博士 (京都大学)
- ② 科学コミュニケーション論・生命倫理
- ③ 現代社会における生物学・生命科学
- ④ 生命科学と社会 (生命科学研究科)
- ⑤ *The ethical and political discussions on stem cell research in Japan*. In *CROSSING BORDERS: Cultural, religious and political differences concerning stem cell research* (W. Bender 他編), pp. 369-379, 2005.



こがちりゅういち
古勝隆一
文化構成部門

- ① 文学博士 (東京大学)
- ② 中国古典学
- ③ 中国注釈学史研究
- ④ 『尚書今古文注疏』校読 (文学研究科/文学部共通)
- ⑤ 『中国中古の學術』研文出版 2006年



たなべあきお
田辺明生
文化研究創成部門

- ① 学術博士 (東京大学)
- ② 人類学、南アジア地域研究
- ③ インド社会の歴史人類学
- ④ 南アジア地域研究論 (アジア・アフリカ地域研究研究科)
- ⑤ Toward Vernacular Democracy: Moral Society and Post-postcolonial Transformation in Rural Orissa, India. *American Ethnologist* 34-3, 2007, pp. 558-574.



こせき たかし
小関 隆
文化連関部門

- ① 社会学博士 (一橋大学)
- ② イギリス・アイルランド近現代史
- ③ 第一次大戦期のアイルランド問題
- ④ イギリス史における第一次大戦 (文学研究科/文学部共通)
- ⑤ 『プリムローズ・リーグの時代——世紀転換期イギリスの保守主義』岩波書店 2006年

ついき こうすけ
立木康介
文化生成部門

- ① Docteur en psychanalyse (Université Paris 8)
- ② 精神分析
- ③ 精神分析的知の思想史的位置づけ
- ④ 歌謡曲に学べ! (全学共通科目ポケットゼミ)
- ⑤ 『精神分析と現実界——フロイト/ラカンの根本問題』人文書院 2003年



たかぎ ひろし
高木博志
文化生成部門

- ① 文学博士 (北海道大学)
- ② 日本近代史
- ③ 近代天皇制の文化史的研究
- ④ 近代古都論 (文学研究科/文学部共通)
- ⑤ 『近代天皇制と古都』岩波書店 2006年



ふなやま とおる
船山 徹
文化構成部門

- ① 文学修士 (京都大学)
- ② 仏教学
- ③ インド・中国における仏教の学術と実践
- ④ 仏教における聖者観の諸相 (文学研究科/文学部共通)
- ⑤ Kamalaśīla's Distinction between the Two Sub-Schools of Yogācāra. A Provisional Survey. H. Krasser et al. (eds.), *Pramānakīrtiḥ. Papers Dedicated to Ernst Steinkellner on the Occasion of His 70th Birthday*, Wien 2007.



たかしな えりか
高階絵里加
文化連関部門

- ① 文学博士 (東京大学)
- ② 日本近代美術史
- ③ 近代日本の美術と西洋
- ④ 近代美術の中の日本と西洋 (全学共通科目)
- ⑤ 『異界の海——芳翠・清輝・天心における西洋』三好企画 2000年



みやけ きよし
宮宅 潔
文化構成部門

- ① 文学博士 (京都大学)
- ② 中国古代史
- ③ 秦漢制度史の研究
- ④ 東アジア文献学 (人間・環境学研究科)
- ⑤ 「秦漢刑罰体系形成史への一試論——腐刑と戍邊刑」『東洋史研究』66-3 2007年



やぎ たけし
矢木 毅
文化表象部門

- ① 文学修士 (京都大学)
- ② 東洋史 (朝鮮中世近世史)
- ③ 朝鮮前近代における政治史及び政治制度史の研究
- ④ 朝鮮近世後期政治史の研究 (文学研究科/文学部共通)
- ⑤ 『高麗官僚制度研究』京都大学学術出版会 2008年



やすおかこういち
安岡孝一
漢字情報研究センター

- ① 工学博士 (京都大学)
- ② 人文情報学
- ③ 文字コード論
- ④ 文字コードの歴史 (人間・環境学研究科)
- ⑤ 『キーボード配列QWERTYの謎』(共著) NTT出版 2008年

■ 助教



い すんよぶ
李 昇燁
文化連関部門

- ① 文学博士 (京都大学)
- ② 朝鮮近代史
- ③ 朝鮮在住日本人社会の研究
- ④ 朝鮮語文献講読 (文学研究科/文学部共通)
- ⑤ 「三・一運動期における朝鮮在住日本人社会の対応と動向」『人文学報』92 2005年



くぼあきひろ
久保昭博
文化生成部門

- ① 文学博士 (パリ第3大学)
- ② フランス文学・文学理論
- ③ 文学ジャンル論、文体論、フィクション理論
- ④ 20世紀前半のフランス詩 (文学部)
- ⑤ *Le roman comme construction poétique: A propos de «Technique du roman» de Raymond Queneau. Études de Langue et littérature françaises, 2008.*



おの であしろう
小野寺史郎
現代中国研究センター

- ① 学術博士 (東京大学)
- ② 近代中国史
- ③ 近代中国ナショナリズム研究
- ④ なし
- ⑤ 「民国初年の革命記念日——国慶日の成立をめぐって」『中国——社会と文化』20 2005年



くらしま あきら
倉島 哲
文化研究創成部門

- ① 文学博士 (京都大学)
- ② 社会学
- ③ 身体技法の習得過程の社会学的研究
- ④ 社会学的身体論の古典購読 (文学部)
- ⑤ 『身体技法と社会学的認識』世界思想社 2007年



きくち あきら
菊地 暁
文化連関部門

- ① 文学博士 (大阪大学)
- ② 日本民俗学
- ③ 近代日本における民俗誌的実践の総合的研究
- ④ 身体論のすすめ (全学共通教育科目)
- ⑤ 『柳田国男と民俗学の近代——奥能登のアエノコトの二十世紀』吉川弘文館 2001年



くろいわやすひろ
黒岩康博
文化生成部門

- ① 文学博士 (京都大学)
- ② 日本近代史
- ③ 戦間期日本の大衆社会・文化
- ④ なし
- ⑤ 『万葉旅行の誕生——風景写真と臨地指導』『國文學』53-6 2008年



こいけいくこ
小池郁子
文化研究創成部門

- ① 人間・環境学博士 (京都大学)
- ② 文化人類学
- ③ アフリカ系アメリカ人のオリシャ崇拜運動研究
- ④ ジェンダーと宗教 (全学共通科目)
- ⑤ Embodied Orisa Worship: The Importance of "Physicality" in the Yoruba American Socio-Religious Movement. In *Orisa: Yoruba Gods and Spiritual Identity in Africa and the Diaspora*, 2005.



なが たともゆき
永田知之
漢字情報研究センター

- ① 文学博士 (京都大学)
- ② 中国古典文学
- ③ 唐宋の文学批評
- ④ 中国文化史の諸相 (全学共通科目ボケゼミ)
- ⑤ 「摘句と品第——皎然『詩式』の構造」『東方学報』82 2008年



さかもとゆういちろう
坂本優一郎
文化連関部門

- ① 文学修士 (大阪大学)
- ② イギリス近代史
- ③ 「投資社会」形成史
- ④ 現代史学英書講読 (文学部)
- ⑤ 『空間のイギリス史』 (共著) 山川出版社 2005年



ふじいのりゆき
藤井律之
文化構成部門

- ① 文学博士 (京都大学)
- ② 中国古代中世史
- ③ 中国古代中世の官制史
- ④ なし
- ⑤ 「魏晋南北朝の遷官制度に関する二三の問題——侍中領衛を中心として」『東方学報』78 2006年



たかい
高井たかね
文化表象部門

- ① 人間・環境学修士 (京都大学)
- ② 中国家具史
- ③ 中国家具とその使用に関する研究
- ④ 美学美術史学漢文講読 (文学部)
- ⑤ 「明代後期の宴席における食卓の使用様式——『列卓』・『團坐』を中心として」『京大総合人間学部紀要』10 2003年



ふじはらたつし
藤原辰史
文化生成部門

- ① 人間・環境学博士 (京都大学)
- ② 農業史
- ③ ナチス時代の収穫感謝祭と農民生活
- ④ 第一次世界大戦と現代社会 (全学共通科目リレー講義)
- ⑤ 「ナチス・ドイツの有機農業——「自然との共生」が生んだ「民族の絶滅」」柏書房 2005年



たなかゆりこ
田中祐理子
文化研究創成部門

- ① 学術修士 (東京大学)
- ② 近代西洋医学発展史研究・表象文化論
- ③ 「細菌」の表象史
- ④ 西洋史仏書講読 (文学部)
- ⑤ 「目と言葉——『レーヴェンフック』を考えるために」『人文学報』93 2006年



ふるまつたかし
古松崇志
文化表象研究部門

- ① 文学博士 (京都大学)
- ② 東洋史
- ③ 10~14世紀ユーラシア東方の国家と社会
- ④ なし
- ⑤ 「契丹・宋間の澶淵体制における国境」『史林』90-1 2007年



みや のりこ
宮 紀子
文化構成部門

- ① 文学博士 (京都大学)
- ② 中国文学
- ③ モンゴル時代の政治と文化
- ④ なし
- ⑤ 『モンゴル時代の出版文化』名古屋大学出版会 2006年



もりおかともしこ
守岡知彦
漢字情報研究センター

- ① 博士 [情報科学] (北陸先端科学技術大学院大学)
- ② 多言語情報処理、人文情報学
- ③ 文字オントロジーに基づく文字処理、一般キャラクター論
- ④ なし
- ⑤ CHISE: Character Processing based on Character Ontology, *Lecture Notes in Artificial Intelligence* 4938, pp. 148-162, 2008



むか い ゆうすけ
向井佑介
漢字情報研究センター

- ① 文学修士 (京都大学)
- ② 考古学
- ③ 中国中世の考古学研究
- ④ なし
- ⑤ 「中国北朝における瓦生産の展開」『史林』87-5 2004年



やまざき たけし
山崎 岳
漢字情報研究センター

- ① 文学博士 (京都大学)
- ② 東洋史
- ③ 中国社会史の視点から見た「倭寇」
- ④ なし
- ⑤ 「江海の賊から蘇松の寇へ——ある『嘉靖倭寇前史』によせて」『東方学報』81 2007年

■ 客員

ヴィータ シルヴィオ
VITA, Silvio
イタリア国立東方学研究所所長

- ① 文学博士 (イタリア国立ナポリ東洋大学)
- ② 東アジア宗教史
- ③ 大蔵経編纂の歴史・近代日本の仏教と知識人・日欧交渉史
- ④ なし
- ⑤ Printings of the Buddhist 'Canon' in Modern Japan, in Giovanni Verardi and Silvio Vita (eds.): *Buddhist Asia* 1, Kyoto, 2003.

ジャック ベノワ
JACQUET, Benoit
フランス国立極東学院京都支部長

- ① 工学博士 (京都大学・パリ第8大学)
- ② 建築史・意匠
- ③ 日本近現代建築史・建築論
- ④ なし
- ⑤ 「丹下健三の『伝統』と『創造』の概念に潜むモニュメンタリティの原理——丹下健三の建築言説の形成に関する研究」『日本建築学会計画系論文集』2006年、211-216ページ

漢字情報研究センター



1962年5月、日本学術会議は人文・社会科学を振興する一方策として、学術情報体制の整備問題を取り上げ、各専門分野における学術資料を完全に収集し、これを研究者の共同利用に供するという、ドキュメンテーション・センター構想を政府に勧告した。こうした要請に応じて、当時の文部省は「人文・社会科学専門文献センター案」を作成し、1963年度から66年度にかけて、全国に五つの文献センターを設置した。1965年4月、京都大学人文科学研究所の附属施設として開設された東洋学文献センターもその一つである。

同センターは、東洋学に関する文献・資料を収集、整理して、研究者の共同利用に供すること、および東洋学に関する学術情報活動を活発に行うことを主たる目的とした。前者については、東方文化学院京都研究所の創設以来、学問的実用書を整備することを目的として収集された、漢籍をはじめとする人文科学研究所所蔵の東洋学に関する資料を広く内外の研究者に公開するとともに、それまで比較的手薄だった分野、たとえば中国の地方志や明人の文集などの資料についても、写真複製の方法によって他の機関から系統的に受け入れることで充実をはかってきた。

後者については、これも東方文化学院京都研究所設立後まもなく、1935年4月にその第1冊が編集された『東洋史研究文献類目』を継承して、世界で発表される、東洋学に関する多数の論文および単行本を年次ごとにまとめ、内容によって分類し、さらに著者索引を附した『東洋学文献類目』を、現在に至るまで毎年刊行している。また、1963年に出版された『京都大学人文科学研究所漢籍分類目録』の後を受ける形で、人文科学研究所創立50周年の記

センター長 森 時彦
センター主任 井波陵一

教授 井波陵一
武田時昌

准教授 WITTERN, Christian
(ウィッテルン・クリスティアン)

安岡孝一

助教 守岡知彦
山崎 岳

助手 梶浦 晋



念事業として、1979年、同所が『京都大学人文科学研究所漢籍目録』を刊行した際にも中心的役割を果たし、利用者の便宜をはかってきた。

『東洋学文献類目』は、1981年度版以降、すでにデータベース化されており、東洋学、とりわけ中国学におけるコンピュータ利用の先駆けを成した。しかし、膨大な量の歴史資料・文献のデジタル化が急速に進み、人文諸科学の性格さえ変わりつつある欧米に比べると、東洋学文献センターが共同利用に供する資料の中核たる漢字文献の場合、そのデジタル化は著しく立ち遅れていると言わざるを得ない。この情況は、漢字によって受け継がれてきた文化にとって、その将来を左右する大きな問題であり、当然のことながら、東洋学に関する学術情報活動の拠点たる同センターにおいても、その担うべき役割について再検討を迫られることとなった。その結果、同センターを漢字文献の国際的情報交換の拠点にふさわしい組織に拡大改組することとなり、教授2・助教授2・助手2に教官定員が増強され、2000年4月、漢字情報研究センターとして新たなスタートを切るに至った。

本センター (<http://kanji.zinbun.kyoto-u.ac.jp/>) が現在展開している主要事業は以下の通りである。

連携事業

全国漢籍データベースの構築

<http://kanji.zinbun.kyoto-u.ac.jp/kanseki/>

幹事機関 国立情報学研究所

東京大学東洋文化研究所附属東洋学研究情報センター

京都大学人文科学研究所附属漢字情報研究センター

全国漢籍データベース協議会

<http://kanji.zinbun.kyoto-u.ac.jp/kansekiyogikai/>

単独事業

定期刊行物

『東洋学文献類目』、『東方学資料叢刊』、『漢字と情報』

漢籍担当職員講習会

初級・中級、各年1回5日間

セミナー

1. TOKYO 漢籍 SEMINAR

*講演記録は「京大人文研漢籍セミナーシリーズ」(研文出版)として出版

2. 東洋学へのコンピュータ利用研究セミナー

データベースの構築と公開

東洋学文献類目、京都大学人文科学研究所所蔵石刻拓本資料、拓本文字データベース、京都大学人文科学研究所所蔵甲骨文字、西域行記データベース、東方学デジタル図書館、所蔵中国雑誌目録

なお、人文科学研究所の有する膨大な調査研究記録などの史料については未だ十分な情報化が進んでいないため、これらの史料のデジタルアーカイブ化に取り組むべく、現在、東アジア人文情報学センターへの改組を目指している。

漢字情報研究センター利用規程

平成15年12月8日制定 平成21年2月12日改正

趣旨

第1条 京都大学人文科学研究所附属漢字情報研究センター（以下「センター」という。）が保有する東洋学関係の文献その他の資料（以下「図書資料」という。）の利用は、この規程の定めるところによる。

図書資料

第2条 センターに、次の図書資料を置く。

- ①貴重書
- ②普通書
- ③参考図書
- ④逐次刊行物
- ⑤その他の資料

利用者

第3条 図書資料を利用できる者（以下「利用者」という。）は、次の各号に掲げるものとする。

- ①京都大学人文科学研究所（以下「本研究所」という。）の教職員
- ②本研究所の名誉教授及び名譽所員
- ③本研究所の元教職員、非常勤講師、非常勤教職員、招へい外国人学者、内地研究員、外国人共同研究者及びこれに準ずる者
- ④本研究所の共同研究班参加者、日本学術振興会特別研究員、研修員、研究生及びこれに準ずる者
- ⑤本研究所以外の本学教職員（名誉教授を含む）、日本学術振興会特別研究員、研修員、研究生及びこれに準ずる者
- ⑥本学の大学院生及び学生
- ⑦図書資料の利用を申し出た学外者

閲覧場所

第4条 図書資料の閲覧は、閲覧室内で行うものとする。

開室時間

第5条 閲覧室の開室時間は、月曜日から金曜日までの午前9時30分から正午及び午後1時から4時30分までとする。ただし、図書資料の出納は午後4時までとする。

休室日

第6条 閲覧室の休室日は、次のとおりとする。

- ①土曜日及び日曜日
- ②国民の祝日に関する法律（昭和23年法律第178号。以下「祝日法」という。）に規定する休日
- ③本学創立記念日（6月18日）
- ④夏期曝涼（8月1日から8月15日）
- ⑤年末年始（12月26日から翌年1月5日）
- ⑥毎月末日（末日が土曜日、日曜日又は祝日法に規定する休日にあたる場合は、次の開室日）

2 センター長が、特に必要と認めるときは、臨時に閲覧室の業務の一部又は全部を休止することができる。

閲覧室利用登録

第7条 第3条第2号から第7号に掲げる者が閲覧室の利用を希望する場合は、所定の京都大学人文科学研究所附属漢字情報研究センター閲覧室利用申込書を閲覧室の受付（以下「閲覧受付」という。）に提出し、京都大学人文科学研究所附属漢字情報研究センター閲覧室利用カード（以下「利用カード」という。）の交付を受けるものとする。ただし、申込みの日に限って利用を希望する者については、利用カードの交付を省略することができる。

2 利用カードの交付を受けた者は、次回以降閲覧室に入室する際、利用カードを閲覧受付に提出するものとする。

3 利用カードの有効期間は、交付日の属する年度の末日を超えない範囲内でセンター長が定める。

自由閲覧

第8条 開架の図書資料は、閲覧室で自由に閲覧することができる。

書庫内図書資料の閲覧

第9条 書庫内の図書資料の閲覧を希望する者は、閲覧申込書を閲覧受付に提出するものとする。

2 同時に閲覧できる図書資料は、5点以内とする。

3 図書資料の返却は、閲覧受付において掛員の確認を得て行うものとする。

閲覧の制限

第10条 センター長は、次の各号に掲げる場合においては、閲覧を制限することができる。

- ①図書資料に独立行政法人等の保有する情報の公開に関する法律平成13年法律第140号。以下「情報公開法」という。）第5条第1号、第2号及び第4号イに掲げる情報が記録されていると認められる場合（当該情報が記録されている部分に限る。）
- ②図書資料の全部又は一部を一定の期間公にしないことを条件に個人又は情報公開法第5条第2号に規程する法人等から寄贈又は寄託を受けている場合（当該期間が経過するまでの間に限る。）
- ③図書資料の原本を利用させることにより当該原本の破損もしくはその汚損を生じるおそれがある場合又は当該資料が現に使用されている場合

利用の制限

第11条 閲覧室が非常に混雑している場合等、本センターの教育・研究活動に支障をきたすおそれがある場合においては、センター長は閲覧室の利用を制限することができる。

複写

第12条 利用者は複写を依頼することができる。ただし、次に掲げる場合には図書資料の複写は行わない。

- ①著作権の侵害となるおそれのあるとき
- ②図書資料が複写により破損するおそれのあるとき
- ③原所蔵者との契約に反するおそれのあるとき
- ④特に時間を要し、他の業務に支障を生ずるおそれのあるとき

2 複写を依頼しようとする者は、所定の複写申請書を閲覧受付に提出し、センター長の承認を受けなければならない。

3 複写料金の取扱いについては、別に定める。

貸出

第13条 貸出は、第3条第1号に掲げる者に対する、研究室貸出に限っておこなう。ただし、センター長が特に必要と認められた場合はこの限りではない。

2 研究室貸出に関する期間、冊数、その他の制限は別途定める。

転貸の禁止

第14条 利用者は、貸出中の図書資料を他の者に転貸してはならない。

返却

第15条 貸出を受けた図書資料は、貸出期間内に返却しなければならない。

2 利用者は、貸出期間内であってもその利用資格を失ったときは、ただちに借用している図書資料を返却しなければならない。

3 センター長が特に必要と認めるときは、貸出中の図書資料の返却を求めることがある。

書庫内検索

第16条 書庫内検索は、第3条第1号から第2号に掲げる者にとっては、掛員に身分証を提示して入庫することができる。

利用者の責任

第17条 利用者は、図書資料に含まれる情報を利用することによって著作権、プライバシー等第三者の権利利益を侵害したときは、その一切の責任を負うものとする。

参考調査

第18条 利用者は、教育又は研究を目的とする場合に限り、所定の手続きにより学術にかかる調査及び情報の提供を依頼することができる。ただし、次に掲げる場合には参考調査を行わないことができる。

- ①図書資料の鑑定、解読若しくは翻訳、学習課題の回答その他のセンターの業務として対応することが適当でないと認められるとき
- ②回答に著しく費用又は時間を要することが明らかである場合等、他の業務の遂行に著しい支障を及ぼすおそれがあるとき

弁償の責任

第19条 利用者は、その責に帰すべき事由により、施設、物品又は図書資料を滅失し、破損し、若しくは汚損したときは、その損害を賠償するものとする。

利用の停止

第20条 センター長は、他の利用者に迷惑を及ぼした者又は及ぼすおそれのある者並びに図書資料を滅失、破損若しくは汚損を生じさせた者又は生じさせるおそれのある者に対して、退室を命じ、又は入室を拒否することができる。

2 センター長は、この規則若しくはその他の規則に違反し、又はセンター長の指示に従わない者に対して、図書資料の利用を停止することができる。

雑則

第21条 利用者の閲覧に供するため、図書資料の目録及びこの規程を常時閲覧室内に備え付けるものとする。

第22条 この規程に定めるもののほか、規程の実施に関し必要な事項は、センター長が別に定める。

改正

第23条 この規程の改正は、センター専門委員会の議を経て、センター長がこれを行う。

附則（平成15年12月8日制定）

1. この規程は、平成16年4月1日から施行する。
2. 漢字情報研究センター図書室利用規程（平成12年4月1日制定、平成13年3月7日改正）は廃止する。

附則（平成21年2月12日制定）

この規程は、平成21年2月13日から施行する。

現代中国研究センター



かつての「革命聖地」延安も、改革・開放 30 年を経て、高層ビルの建ち並ぶ都市へと変貌した

センター長 森 時彦
センター主任 石川禎浩

教授 森 時彦 (所内兼任)
岩井茂樹 (所内兼任)
籠谷直人 (所内兼任)
江田憲治 (学内兼任)
山本裕美 (学内兼任)
平田昌司 (学内兼任)

准教授 石川禎浩 (専任)
袁 広泉 (客員)
池田 巧 (所内兼任)

助教 小野寺史郎 (専任)



人文研のホームページに掲げられている現代中国研究センターのアイコン

現代中国研究センターは、現代中国についての研究を重点的に推進するとともに、京都大学における現代中国研究者が持続的な共同研究を行うための拠点を構築することを目的として、2007年4月1日に設置された新しい附属研究施設である。本センターは、人間文化研究機構(大学共同利用法人)による「地域研究推進事業」の一環として、同年4月に同機構と京都大学とによって共同設置された「現代中国地域研究京都大学拠点」の実体的組織である。同機構は、京都大学のほかに、慶應義塾大学(東アジア研究所現代中国研究センター)、東京大学(社会科学研究所現代中国研究拠点)、早稲田大学(アジア研究機構現代中国研究所)、財団法人東洋文庫(現代中国研究資料室)、総合地球環境学研究所(中国環境問題研究拠点)とそれぞれに研究拠点を共同設置したが、本センターは、現代中国地域研究を進めるこれら5拠点と連携して、ネットワーク型の共同研究を実施している。

近年の中国の政治、経済分野におけるめざましい台頭に伴い、日本の中国研究も、近現代および現在の中国を分析する新たなアプローチ・手法を要請されていることは言うまでもない。「東洋学」の豊かな資産を含めて、京都大学の中国研究のレベルは世界でも高水準にある。だが、21世紀を迎えた今日、京都大学の中国学はこれまでの研究体系に加えて、同時代的かつ動的なアプローチを求められている。すなわち、人文科学研究所をはじめとして、学内の関係諸部局がこれまで蓄積してきた豊富な研究リソースを十分に活用し、かつ学内の研究者が深化させてきた高水準の個別研究を有機的にむすびつける必要があろう。本センターは、この課題に応えるべく設置されたのである。

人間文化研究機構が国内の各大学・研究機関と共同設置した「現代中国地



北京オリンピックの開催を前に、国旗や五輪旗を買う親子。北京五輪は中国の国威発揚の場となった



近現代中国の新聞などを収蔵しているセンターの「現代中国情報資料集積基地」

域研究拠点」は、各拠点の得意分野・特色を生かしつつ「現代中国」を分担研究しているが、本センター（京大拠点）は、京都大学がこれまで培ってきた人文系中国学の蓄積を踏まえ、「人文学の視角から見た現代中国の深層構造の分析」を総合研究テーマとし、「深みのある現代中国研究」を推進することを掲げている。「深みのある現代中国研究」とは、単に現在の中国がどうなっているのかを検討するだけではなく、現代の中国は如何にして形成されたのかを、人文学的・歴史学的パースペクティブから分析するという含意である。

人員の面では、専任教員3名（うち1名は人間文化研究機構から派遣された研究員で、本研究所にあっては客員准教授に相当）、所内兼任4名、学内兼任3名を配置し、所外委員を含む運営委員会のもと、学外の教員、研究者を受け入れる二つの研究グループ（研究グループ1「現代中国文化の深層構造」、同2「現代中国政治の社会基盤」）を設け、両グループは連携して、関連資料の収集および研究を進めている。主な活動としては、石川禎浩准教授を代表者とする研究グループ1が2006年以來、共同研究班「中国社会主义文化の研究」を行っており、他方、森時彦教授を代表者とする研究グループ2が、従来の「20世紀中国の社会システム」共同研究班に引き続き、2008年度より「長江流域社会の歴史景観」共同研究班を開催している。両研究班は、それぞれ隔週金曜日に定例の研究会を開催し、現代中国の深層構造を人文学、とりわけ歴史学の立場から解明する課題に取り組んでいる。

人文科学研究所の研究棟の移転に伴い、現代中国研究センターも2008年4月に人文研新館4階に移転し、研究拠点としての姿を現した。センターの関連施設としては、工具書・CNKI用パソコン端末・会議用テーブルを備えた「現代中国共同研究室」と近現代中国の新聞・新編地方志・地図を収蔵し、デジタルマイクロフィルムスキャナを備えた「現代中国情報資料集積基地」がその中心に位置する。「現代中国共同研究室」と「現代中国情報資料集積基地」では、収集された諸資料・データベース・地図などが、広く関連研究者の利用に供されている。

中国の変容が長期に続く、史上空前のものであることを考えれば、ネットワーク形成や共同研究を通じて現代中国研究のレベルアップをはかることは、避けて通れない長期的課題である。本センターはその課題に立ち向かう研究集団の中核たらんとしているのである。



中国近現代史の共同研究班、研究者が出版した報告論文集、資料集、著作など

人文学国際研究センター

教授(兼任) 田中雅一
 准教授(兼任) 稲葉 穰
 助教(兼任) 小池郁子
 客員教授 VITA, Silvio
 (ヴィータ・シルヴィオ)
 客員准教授 JACQUET, Benoit
 (ジャケ・ブノワ)

人文学国際研究センターは、人文学研究のための国際拠点として、2006年4月、本研究所附属施設として設置された。現在は兼任・客員総計5名のスタッフを置き、人文学にかかわる先端的研究の活性化と関連する成果の発信を目指している。

主たる活動内容としては、以下の四つがあげられる。

1 人文学に関わる国際シンポジウムの開催／公開セミナーの開催

国内外の研究者および研究成果の有機的連携と総合に資するべく、現在のところ年に一、二度の頻度で、国際シンポジウムを企画、開催している。2007年度は平和と戦争についての国際ワークショップ「War, Peace and Military in Asia」を、2008年度には中央アジア古代の美術史・考古学に関わる「Afghanistan Meeting 2008: Reconsidering Material and Literary Sources」、敦煌学研究国際ワークショップ「多民族の敦煌」が開催された。これと並んで、主に外国人スピーカーを招いた公開セミナーを数ヶ月に一度のペースで開催している。2006年度はラファール・シュリヴァスタヴァ氏がインドのスラム街について、2007年度はデイヴッド・チデスター教授(ケープタウン大学)が19世紀後半の植民地支配と宗教に関して、2008年度にはフィロメナ・キート氏(上智大学研究員)が原宿のストリート・ファッションについて、また、イムレ・ガランボス氏(大英図書館研究員)が10世紀の敦煌文書中に見える旅行記について、それぞれ講演を行った。今後も他の研究機関などと連携しつつ、同様のシンポジウム、公開セミナーを主催していく予定である。

2 内外の研究者の交流の促進と研究ネットワークの構築

最初に記したように、国際研究センターの設置目的は人文学研究のための国際連携拠点を築くことにある。国際研究センター自体は人文科学研究所の



イラン西部に残る中国風龍のレリーフ。モンゴル時代



ネイティブ・アメリカンの祭り「パウワウ」。イギリス



国際シンポジウム「Afghanistan Meeting 2008」



公開セミナー「コンタクト・ゾーンという視点」

附属施設として設置されているが、この目的をより十全に実現するため、従来より様々な分野において協働してきたイタリア国立東方学研究所所長およびフランス国立極東学院京都支部長を、人文科学研究所客員教授、准教授として迎え、よりいっそうの研究連携強化をはかっている。両研究機関は、2007年9月に設立された全ヨーロッパ規模のアジア研究協議会であるEuropean Consortium for Asian Field Study (ECAAF) の中核機関でもあり、今後、人文学研究の分野における日本とヨーロッパの研究交流がさらに多角化、深化していく過程で、人文学国際研究センターが日本側の窓口の一つとして機能するよう、現在、様々な面から協議検討を進めている。

3 基幹プロジェクトと連携プロジェクトの実施

一方で実際に共同研究を遂行するためにはなんらかの研究の枠組み、すなわち具体的プロジェクトが必要となる。国際研究センターでは現在「基幹プロジェクト」と「連携プロジェクト」と名付ける二つのプロジェクトを展開している。前者については「複数文化接触領域（コンタクト・ゾーン）の人文学」というテーマのもと、2006年のセンター発足時から共同研究班を組織してきた。研究班員として地域研究や歴史研究、文化研究、ポストコロニアル研究、文化人類学などの専門家を迎え、グローバル化が進む現代社会にとって喫緊の課題であるところの、異文化理解や他者との共存のあり方について議論を重ねている。

後者については、「外からみた近代日本」というテーマのもと、客員教授を班長とする共同研究を組織している。そこでは、主に国外の研究者を招いて、国際的な視野、視点からの日本社会の様態と、近代世界における異文化接触のあり方についての研究報告、討論を行っている。

4 成果の公刊

これらの研究プロジェクトの成果は、上述の公開セミナーやシンポジウムの他に『Contact Zone コンタクト・ゾーン』誌上にも発表されている。同誌は年1回の刊行で、現在まで2号が刊行されている。創刊号は、二つの講演会の記録と9本の学術論文を、第2号は、講演会の記録1本と論文10本、研究ノート1本、書評2本を掲載している。



定期刊行物『Contact Zone コンタクト・ゾーン』

移民の近代史

——東アジアにおける人の移動

班長 水野直樹

19世紀後半から20世紀前半の時期、東アジアにおいて大規模な「人の移動」という現象が生じた。東アジア地域の世界資本主義システムへの包摂、日本帝国の膨張、それらにともなう各地域の社会的変動などがその要因である。

この問題についてこれまで研究がなされてこなかったわけではない。しかし、従来の研究の多くが各国・地域別になされてきたため、東アジア全体を対象にして総合的に考察されることは少なかった。本研究は、日本、朝鮮、中国（主に「満洲」地方）など各地域間の人の移動とその背景を検討することによって、人の移動の歴史的意味を考察することを目的としている

各地域で生じた人の移動は、それぞれ背景を異にしているかに見えながら、相互に関連し合っている場合がある。「満洲国」成立後の日本の移民政策を例にとると、日本人の満洲移民、朝鮮人の日本「内地」移住および満洲移住の間には、明確な相互関係が見られる。日本政府が朝鮮人の「内地」移住を抑制する政策をとったのに対して、朝鮮総督府はそのためには朝鮮人の満洲移住が必要であると主張した。他方、満洲国を実質的に支配する関東軍は、日本人移民を優先する立場から朝鮮人の移住に対して消極的であった。このような移民政策の面での相互関係を確認した上で、移住先において日本人・朝鮮人・中国人がどのような関係にあったのか、ということも検討すべき課題である。

さらに、第二次世界大戦の終結、日本の敗戦、それに続く各国・地域における政治情勢の変動は、移住先から故郷への帰還（引き揚げ）だけでなく新たな人の移動を生み出した。このような問題も視野に入れながら、歴史学・地理学・人類学・社会学など学問分野を異にする研究者の共同研究として、「移民の近代史」を考察している。

班員

竹沢泰子、籠谷直人、小関 隆、高木博志、石川禎浩、李昇燁、岩井茂樹、藤原辰史【所外】河原典史、金永哲、坂口満宏、坂本悠一、長沢一恵、廣岡浄進、福井 譲、福本 拓、藤永 壯、宮本正明、安岡健一、李正熙、蘭信三、西村一之、高野昭雄、上田貴子、小野容照、猪股佑介、松田利彦

王権と儀礼

班長 藤井正人

古代インドにおける王権と儀礼の関係を、ヴェーダ祭式文献を基礎資料にしてインド学、言語学、歴史学、考古学、人類学、美術史など複数の視点から分析するとともに、さまざまな地域や時代における王権と王権儀礼に関わる諸問題について比較研究をおこなっている。王権と儀礼との関係は、その社会における政治的および宗教的権力である王権と司祭権の関係（特に一体化しているのか分離しているのか）にもかかわっているため、それについて具体的な資料に基づいて研究することもめざしている。

隔週の研究会では、会読と報告という二つの形式の会合を交互に開き、資料の蓄積と研究視野の拡大をはかっている。会読では、ヴェーダ時代の王権儀礼のひとつであるラージャスーヤに関するすべてのサンスクリット語テキストを読解することによって、この儀礼に係る一次資料の集成と研究をすすめている。ラージャスーヤは、灌頂と王座につく儀礼とを中心に戦車走行や賭博などの多くの催しを含む大がかりな王即位式である。本来の比較的小さな即位儀礼が、体系化されたヴェーダ祭式のなかに編入され、大規模な王権儀礼として整備されたものである。この儀礼に関して、近年学界にもたらされたヴァードゥーラ派ヤジュル・ヴェーダの新資料をもとり入れた総合的な資料集を出版する計画である。

報告では、班員およびゲストスピーカーが、王権と儀礼に係る種々のテーマで報告をおこなっている。また、会読で作成したラージャスーヤの資料をさまざまな角度から分析し検討することによって、古代インドの王権と王権儀礼の特徴を学際的な視点から明らかにすることもめざしている。最終成果として、さまざまな地域と時代の王権と儀礼をめぐる論文集にまとめる予定である。

班員

岡村秀典、田中雅一、田辺明生、船山 徹【所外】梶原三恵子、赤松明彦、アーチャーリヤ・ディワーカル、井狩彌介、上杉彰紀、永ノ尾信悟、大島智靖、北田 信、クノーブル・ヴェルナー、後藤敏文、小林正人、小牧幸代、定金計次、土山泰弘、手嶋英貴、堂山英次郎、徳永宗雄、西村直子、森 雅秀、矢野道雄、横地優子

陰陽五行のサイエンス

班長 武田時昌

中国では、古来より自然科学の諸分野において先進的な発見、発明を成し遂げるとともに、自然現象の法則性や物類の相互関係を定式的に把握し、自然をアナロジーにして人倫社会のあり方、人間の生き方を考究しようとする自然哲学を大いに発展させてきた。そして、自然学は易を中核とする占術と複合的に絡み合い、術数学と呼ばれる特有の学問領域を形成した。その学問的特色や理論形成を総合的に研究すれば、世界文明史においてきわめてユニークな科学思想の歴史を描き出すことができるにちがいない。

術数学の理論構造を生み出すパラダイム的な役割を果たしたのは、陰陽五行説である。これまでの研究においては、陰陽五行説の成立過程や配当説、それを援用した漢代の政治思想等に詳しい考察が試みられてきた。しかしながら、三国時代以降の展開については、十分な検討がなされておらず、それが術数学研究を遅滞させている要因になっている。

ところが、近年に出土した先秦から漢初に至る簡帛資料には、天文暦学、医薬学や養生術、占術に関する著作が多数含まれており、陰陽五行説の起源や方術（自然学を含む）の理論的形成に新たな情報が得られた。しかも、それらは中世の術数書に展開された論説との間に密接な関連性を見いだすことができ、大いに注目される。

そこで、本プロジェクトでは、天人感応、物類相感等を含めた広義の陰陽五行説がどのような作用を発揮したのかを具体的に考察し、方術から術数学への変容過程を探ることで、術数学研究の突破口を開こうとするものである。考究対象は広汎な領域に跨っているために、諸分野の専門家に参加を募り、陰陽五行をめぐる諸説を集録する『五行大義』『医心方』等を会読しながら、複眼的、多角的な視野から陰陽五行説の構造的な把握を試みている。

班員

【所外】相川佳予子、宇佐美文理、浦山あゆみ、間 淑珍、大形 徹、加藤千恵、金 志玪、木村亮太、熊野弘子、古藤友子、坂出祥伸、佐野聖子、櫻井謙介、清水浩子、鄭 宰相、全 勇勲、石 立善、多田伊織、東郷俊宏、長野 仁、仲畑 信、橋本昭典、橋本敬造、東川祥丈、真柳 誠、三鬼丈知、水野杏紀、宮崎順子、宮島一彦、村田 浩、森泉和人、森村謙一、矢野道雄、ラブチェフ・セルゲイ、ラインス・ゲアハルト 他

漢簡語彙の研究

班長 富谷 至

2005年度から5年の期間をもって発足した本研究班は、班名が示す通り、漢代の木簡、竹簡に見える用語を解明することを目的とする。

我が人文科学研究所における簡牘研究は、戦後まもなくの1950年代初、森鹿三、藤枝晃などが組織した敦煌漢簡、居延漢簡の解読の共同研究班以来、長い伝統を有し、現在では東方部制度史分野（旧歴史地理分野）の富谷が継続して行っている。富谷が班長となって以後、研究班の成果として、『辺境出土木簡の研究』（朋友書店 2003年）、『江陵張家山二四七号墓出土漢律令の研究』訳注編・論考編（朋友書店 2006年）の研究報告を出版した。

2005年度からは、簡牘研究の一応の集大成として、居延漢簡、敦煌漢簡など漢代辺境一帯から出土した木簡から語彙を抽出して、その意味を定義して、最終的に漢簡語彙辞典を作成し出版することを目的としている。語彙を解説し、簡牘および文献史料からその用例を挙げるもので、現段階では、一字、熟語をあわせて2000語彙を処理し、最終的には5000語彙近くになるであろう。これによって、漢簡の中で使われた用語の正確な意味が明らかになり、漢簡研究は飛躍的に進むこと、間違いない。また韓国木簡、日本木簡の研究にも貢献できるであろう。語彙辞典の出版は、出版社、出版年（2012年度）も決まっており、目下、班員はその閑静に全力を傾けている。

研究班には、国内、国外（日本に長期滞在する中国、韓国、欧米の外国人研究者）から簡牘を専門にする研究者が毎週金曜日午前中に集まり、1年のうち正月と8月中旬の1、2週間を除いて休むことはない。また、班員には本務校の職務により欠席する以外は、毎回の出席を義務づけている。

班員

井波陵一、宮宅 潔、藤井律之、森谷一樹 【所外】辻 正博、森谷一樹、大川俊隆、佐藤達郎、杉本憲司、角谷常子、鷹取祐司、陳 波、馬場理恵子、目黒杏子、吉村昌之、米田健志、鷺尾祐子、土口史記、山元宣宏、太田麻衣子、田中一輝、大橋成行、劉 欣寧、石 洋

虚構と擬制

——総合的フィクション研究の試み

班長 大浦康介

本研究は、従来文学、哲学、論理学、法学などの分野で行われてきたフィクションの研究を相互に関係づけるとともに、美術や音楽、歴史学、人類学、自然科学などの諸学問における同種の概念の有効性を検討し、あわせて総合フィクション学(General Fictology)とでも呼ぶべきディシプリンの構築をめざすものである。

小説、演劇、映画、テレビドラマといった狭義のフィクションはもちろん、種々のゲームや子供の「ごっこ」遊び、様相論理学があつかう可能世界、民法などという擬制、歴史記述の物語性と「うそ」、宗教儀礼の仮構性、自然科学における作業仮説やメタファー、認知科学におけるシミュレーションなど、「フィクション的」と呼びうる現象は少なくない。それらの共通点と違いは何か、またそれらを貫く虚構性の概念の定立は可能か。これが第一の問いである。

「虚構」と「擬制」はいずれも“fiction”の訳語だが、小説や演劇に代表される「虚構」の定義が根底において現実／非現実(事実／虚構)という二分法をベースとしているのにたいして、民法などという「擬制」は、現実の制度そのもののなかに設けられた一種の特例として解釈される。杓子定規にならざるをえない法律の、現実にそぐわない部分を、「みなし行為」(AをBとみなす行為)によっていわば撓めたものが擬制である。AはBではないのだからそこには「嘘」が含まれるが、それは法律の円滑な運用をはかるためには必要悪だとされる。これら二つの「フィクション」の比較はすでにわれわれに多くを教えてくれるはずである。

なお本研究は、フランスの社会科学高等研究院(EHESS)においてジャン＝マリー・シェフェールが主催する国際研究プロジェクト「GDR: Fiction」との連携のもとに推進されるものである。

班員

王寺賢太、岡田暁生、久保昭博、倉島 哲、小関 隆、高木博志、田辺明生、立木康介、守岡知彦、近藤秀樹【所外】多賀 茂、近藤秀樹、岩松正洋、青柳悦子、小野原教子、圓田浩二、庄子大亮、河田 学、石田美紀、岩松直子、鷺田睦朗

近代古都研究

班長 高木博志

今日、京都市への観光客は年間4800万人をこえ、空前の「古都」ブームである。また世界遺産登録を競い合う、国内外の歴史都市の顕彰も盛んである。そうしたなかで「古都」を相対化した学問研究も必要であろう。本来、「古都」とは、天皇がいなくなった「旧都」(もとのみやこ)の意である。1869年の東京「奠都」による天皇の畿内よりの離脱は、古代から近世をつらぬく王権の基盤を編成替えする日本史上の事件であり、奈良・京都という古都形成の起点となった。

さて共同研究「近代京都研究」班(2003～2005年度、丸山宏班長)を発展させ、歴史学・建築学・造園学・美術史等の諸分野の研究者による総合的な「近代古都研究」を行いたい。「古都」は近代に生みだされた概念であり、それは古都保存法(1966年)以降の戦後社会に定着した。2003年には古都保存法で大津が指定され、地方旧城下町も「古都」の対象になりつつある。また冠せられた「古都」イメージと都市行政のめざすものは、必ずしも一致したわけでない。たとえばつねに工業・産業振興を行政の基盤におく京都府や市の姿勢をみると、その理念と実態には歴史的にズレがあった。「歴史と都市」を一つの手がかりとして、京都・奈良・首里等の王権と関わった都市のみならず、金沢・仙台・岡山・大阪等の旧城下町といった「古都」を研究対象にしたい。各地の「古都」は、ナショナリズムの高揚とパラレルに、古代や平安時代や藩祖の開市時など、その特色となる時代や来歴を顕彰し「お国自慢」を定式化させた。前近代の「歴史」や「伝統」と、その近現代における捉え返しや葛藤を、政治・社会・文化・経済にわたる現実の中から多角的にみてゆきたい。学際的に近世から現代まで、自由な議論を重ねる中で、日本における「古都」論を考えたい。

班員

岩城卓二、金 文京、黒岩康博、高階絵里加、水野直樹【所外】伊従 勉、山田 誠、中嶋節子、藤原 学、河西秀哉、小林文広、秋元せき、飯塚一幸、井上章一、井原 縁、岩本 馨、内田和伸、大場 修、岡村敬二、長志珠絵、小野健吉、小野芳朗、桐浴邦夫、工藤泰子、黒岩康博、清水愛子、清水重敦、鈴木栄樹、スミス・ヘンリー、高久嶺之介、田島達也、田中智子、谷川 穰、谷山正道、中川 理、並木誠士、羽賀祥二、幡鎌一弘、原田敬一、日向 進、廣瀬千紗子、福井純子、福島栄寿、丸山 宏、毛利紫乃、本康宏史、山上 豊、吉井敏幸、吉田栄治郎

銀雀山漢墓竹書残簡の整理

—中国古代の基礎史料

班長 浅原達郎

2004年4月に「中国古代の基礎史料」班として発足して、すでに5年がたとうとしている。2007年から3年間は、「銀雀山漢墓竹書残簡の整理」というテーマを掲げているのだが、それはそっちのけで、もっぱら戦国時代の楚国の地域から出土した竹簡、すなわち楚簡を読んでいる。われわれにとって、目下それがもっとも重要な研究課題であるから、迷いはまったくないが、風まかせの気ままな研究班だと言われたら、あるいはそうかもしれないと思う。

発足当初は、2名の公式班員のほかに、修士課程2名、学部学生2名という構成であった。年齢的に班長の子供のような若者たちは、それぞれ順調に成長を重ね、最年少の3回生だったメンバーは博士課程に進学、また就職して社会に出たものもひとりいる。みな人間として大きくなったことが、班長の目にもまぶしく映って、喜ばしい。

当初の認識が甘かったと思うのは、新しい班員を得ることの困難である。その手段を持たないといってもよいかもしれない。昨年、3回生の新規参加者を始めて受け入れた。所内のあるかたの紹介である。5年間にただひとりの新入生というのは、すこしさびしい気がしないでもない。

班長はぼんやりと、1、2回生の受講者の多い全学共通科目を開講して、それを共同研究班と結びつけることを考えていた。2003年に開講したばかりの全学共通科目の授業のあとで、質問にやって来た学生が、そのまま当初の最年少班員となったからなのだが、思えば、それは切り株にぶつかったようなものだったのだろう。とはいえ、志を重んずる研究班の性格上、新規班員の受け入れには、罌を仕掛けたり網を張ったりする作為は適切でない。このまま待ちぼうけるのもなさないが、あえて、餌もなく鉤もない針をつけて釣り糸を垂れているのだと、思うことにしよう。

班員

【所外】森賀一恵、森谷一樹

啓蒙の運命

—系譜学の試み

班長 富永茂樹

18世紀のヨーロッパで生まれた「啓蒙」の観念は、19～20世紀をとらえて地球上の広い範囲で受容され展開されるとともに、その展開の過程はさまざまな紆余曲折を経るものであり、容易な道をたどったのではけっしてなかった。そして21世紀の冒頭の今、それはなおも有効な観念だろうか。批判の対象となるべきものだろうか。それとも、もはや批判にさえ値しないのだろうか。

このことの画定は、ただ思想史のうえでの関心を充たすものにとどまらず、近代という長い道のりをぬけて、しかしこのあとのさだかな行方もわからぬままに立ち尽くしている、われわれ自身の生きようにもかかわることからである。そのような思いから共同研究「啓蒙の運命」は出発した。

啓蒙の観念の受容と展開、批判と否定の過程の検証は、まずはそれが準備した近代という時代の、とりわけ政治と社会における変貌と、そこで残されたいくつもの課題に対峙することを要請する。検証の作業では、啓蒙の「生地」であるヨーロッパにとどまらず、東アジアや南アメリカにまでいたる、地球上のさまざまな地域における展開に注目することがひとつの中心となる。また、とりわけ19世紀後半から20世紀前半にかけて啓蒙を哲学的主題として採りあげた、いく人もの思想家にも目が向けられる。

だが、そのいずれの場合にあってもわれわれにとって無視できないのは、展開の過程をその内部から規定する、啓蒙のふくむ論理そのもの、いわば「啓蒙の弁証法」とも呼ぶべき、ひとつの力動であることはいうまでもない。この力動の軌跡を辿りなおし、18世紀に生れた思考のかたちを復元すること、またその200年あまりにわたる変容のあとの、われわれ自身のありようを知ること、これこそが副題に「系譜学」の語のおかれた理由である。

班員

伊藤順二、王寺賢太、岡田暁生、久保昭博、坂本優一郎、田中祐理子、立木康介、藤原辰史、山室信一 【所外】浅田 彰、市田良彦、上田和彦、宇野重規、小田川大典、北垣 徹、桑瀬章二郎、斎藤 光、齊藤 渉、佐藤淳二、白鳥義彦、多賀 茂、田邊玲子、長尾伸一、増田 真、松澤和宏、松下 洋、向井直己、吉田耕太郎

元代の法制

班長 岩井茂樹

『大元国朝聖政典章』（『元典章』）の会読をつうじ、13世紀後半から14世紀初頭にかけての中国社会とその文化の特質を探究することがこの班の目的である。『元典章』は、官府に蓄積されていた「案卷」（行政文書）を資料源とし、業務遂行の便に資するため、選択分類して編集を加えた行政法規要覧である。何処で、誰の手によって編纂されたものか明らかではなく、文字の誤りはもとより、不適切な編纂によって文章が乱れてしまった箇所も多々あるが、貴重な歴史資料である。そこには官文書特有の吏牘体の文書のほか、皇帝が口頭で発した聖旨や、それが下された経緯などを記したモンゴル文の文書を翻訳した文書が含まれている。翻訳に際しては、「直訳体」と呼ばれるこの時代に特有の文体が用いられた。基本的には中国語の語法と語彙に依るものの、膠着語であるモンゴル語の接尾辞を反映した助辞を多用し、他の時代には見られない語彙を使っているために、「直訳体」の文書を解説するには骨が折れる。

会読にさいしては、記事ごとに関係資料にあたって本文を校定し、一字一句にこだわりながら文意を確定することのほか、官庁での処理過程を反映した文書構造を分析することが求められる。研究班の発足に先立って、国際的な協力のもとに作成された『元典章』全文の電子テキストが金文京教授の指導のもとに作成されていたことは、この作業を大いに助けることになった。

会読の成果は『『元典章 礼部』校定と訳注』として『東方学報』に連載中であるほか、班員による研究論文を同誌に掲載している。また、電子テキストを閲覧・検索し、利用者の要求に応じて文書構造を明示するか、刊本の款式のとおりに表示するか選択できるWeb上のシステムを公開する作業が進行中である。

班員

金文京、矢木 毅、宮宅 潔、古松崇志、山崎 岳、高井たかね 【所外】夫馬 進、寺田浩明、植松 正、阿 風、小野達哉、加藤雄三、桂華淳祥、伍 躍、櫻井智美、堤 一昭、中島楽章、船田善之、森田憲司、水越 知、オユンゴア、清水智樹、スローン・ジェセ、石野一晴、市丸智子、藤本 猛、毛利英介、朴 彦、尾崎俊文、武 波

古典を通した 近代アジア史の研究

班長 籠谷直人

18世紀後期までの1人当たり生活水準において、イングランド、中国の揚子江下流域、そして近世日本の摂津では、大きな差がなかったという。18世紀までの中国では、私的所有権がなくとも、比較的 안전한財産権と要素市場が発達していたのであり、19世紀の世界史からみれば、イングランドと揚子江下流域は、同じスタート地点に足を置いていたことになる。そうであるならば、人類の営為のなかで、19世紀になって、なぜイングランドが「分岐」（産業革命）したのか、という問いとともに、なぜ揚子江デルタがイングランドのように分岐する必要がなかったのか、という問いもなりたつ。

こうした比較史は、イングランドが還大西洋圏経済とアジアを包摂する「海洋帝国」となり、中国やインドは、広大な土地資源に根ざした「農業帝国」であった、という差異をも含意している。両帝国は、人の移動に寛容であり、要素市場としての労働力の移動も顕著であった。ヨーロッパ人が開拓した「北アメリカ」と、中国人が強く関与した「東南アジア」を比較することは可能である。

北アメリカと東南アジアは、19世紀後半の移民の8割を受け入れた。ユーラシア大陸の両端は移民の送り出し元であり、南アジアもふくめて、人の移動がその生存基盤を提供していたことを示唆している。移住先では、グローバルな農業ビジネスの勃興がみられた。グローバルな穀物市場を生み出したのは、東南アジアでは、中国人とインド人らであり、北アメリカでは黒人奴隷を用いたヨーロッパ人らであった。移民らは、大型哺乳類を駆逐し、多様な生態系を単一の植生にかえた。そして栽培した大半を、自分たちの母国に輸出しながら富を蓄積した。移動をふくむ人類の生存基盤の径路をアジア史の古典研究から問い直してみたい。

班員

岩井茂樹、田辺明生、坂本優一郎 【所外】陳 來幸、木谷名都子、神田さや子、川村朋貴、溝口 歩、西村雄志、大石高志、城山智子、杉原 薫、谷口謙次、上田貴子、脇村孝平、藪下信幸

三教交渉の研究(2)

班長 麥谷邦夫

中国には主要な宗教が五つ存在する。儒教、仏教、道教、回教、キリスト教である。このうち後二者が普及したのはかなり遅いのに対して、前三者は紀元2世紀後半からさまざまな形で互いに交渉をもちつつ、中国の社会や文化に大きな影響を与えてきた。この三者の相互交渉を称して三教交渉という。

三教交渉の過程では、互いを非難しあう論争ばかりが主役であったわけではない。とりわけ道教は仏教教理の多大な影響を受けて自己形成を遂げてきたのであるが、仏教もまた儒教や道教の影響を受けて、インド仏教とは似て非なる中国仏教へと変貌してきたのである。この過程で、互いに相手のどのような部分を受容し、どのような部分を受容しなかったのか、その結果、それぞれがどのように変容していったのか。その過程を分析することによって、ふたつの大きな文明それぞれの本質を明かにする手懸りが得られよう。本研究班の目的は、三教論争関係の資料をはじめとするさまざまな資料をもとに、三教交渉の諸相を分析することを通じて、中国の思想・宗教ひいては中国文化そのものの本質がどこにあるのかを明かにすることである。このような作業の先には、中国を経由して仏教を受容してきた日本文化の本質もおのずから垣間見えてくるに違いない。

本研究班は、以上のような見通しのもと、まずは中国史における宗教の時代ともいえる、南北朝から隋唐時代における道教を軸とする三教交渉の諸相に焦点を当てることとし、第1期(2000～2005年)においては、江南道教を代表する茅山派の記録である『茅山志』に収録された金石資料の解説を行った。続く第2期(2005～2010年)では、さらに対象範囲を広げて、陳垣『道家金石略』所収の隋唐時代の金石資料の解説を進めている。

班員

ウィッテルン・クリスティアン、金文京、古勝隆一、船山徹【所外】
宇佐美文理、神塚淑子、亀田勝見、齋藤智寛、坂内栄夫、都築晶子、深澤一幸、松下道信、山田俊、横手裕、エスポジト・モニカ、秋岡英行、池平紀子、垣内智之、石立善、孫路易、畑忍、藤井京美、藤井淳、山田明広、閻淑珍、金志珪

人種の表象と表現をめぐる学際的研究

班長 竹沢泰子

本研究会は、「『人種』の概念と実在性をめぐる学際的基礎研究」に続いて、概念と表裏一体の関係にある実在性をめぐる全国型共同研究である。人種は、概念としては生物学的実体がないことが近年の遺伝学研究などで明らかにされているが、医療、社会制度、美意識にいたるまで、強固に社会的リアリティをもっている。本研究は、リアリティの考察の鍵を表象に求め、そのしくみに光を投じる。

欧米の人種表象の研究では、視覚的な表象に関しては膨大な研究の蓄積が存在するが、日本やアジアにみられる「見えない人種」についての、非視覚的な表象にかんしては研究例が多いとは言えない。また人文科学のみならず自然科学をも射程に含め、分野横断的に人種表象と人種の実在性を考える点でもユニークである。班員は、歴史学、社会学、文化人類学、美術史、科学史、生命科学などのさまざまな領域の専門家で構成され、地域的にも、日本、アジア、ヨーロッパ、アフリカ、北米、中南米の専門家がグローバルな視点から人種表象を考察するものである。

本研究会は2009年3月で終了するが、この間さまざまな形で成果を世に問う努力をしてきた。2008年12月5～6日には「第12回京都大学国際シンポジウム 変化する人種イメージ——表象から考える」を開催し、7日に専門家会議を行った(京都新聞2008年12月30日付記事参照、YouTubeでもシンポジウムの全過程を配信中)。2009年には、成果の一部を『人種の表象とリアリティ』(竹沢泰子編 岩波書店)として上梓する予定である。また2007年に京大内の班員でリレー講義の形態で行った京都大学全学共通科目「人種の表象とリアリティ」2008年の「人種概念の総合的理解」については、講義ノートやシラバス、参考文献などが、いずれも京都大学オープンコースウェアのサイトで公開されている。

班員

石川禎浩、李昇燁、加藤和人、小関隆、高階絵里加、田中雅一、田辺明生、藤原辰史

真諦三蔵とその時代

班長 船山 徹

共同研究班「真諦三蔵とその時代」を始めて4年が過ぎた。真諦は6世紀の中頃に中国の南方各地を転々と移動したインド人僧侶であり、著名な仏典漢訳者の1人である。この人物を軸に、インド文化と中国文化の思想的歴史的交差を具体的に知ることをめざしている。

研究班で読んでいるのは、通常知られているような真諦訳(翻訳文献)ではなく、真諦自身の教説を弟子が書き残したものである。その特徴のひとつに、中国文化圏の聞き手を初めから想定しつつインド人の立場から発言する点がある。つまり中印文化の混淆的性格である。ただ、それがきれいな形で現存していれば、ことは単純明快だったのだろうが、現実には複雑を極める。弟子の書き残したものの自体が散佚し、現存しない。そのため我々は後代の諸文献に引用される真諦の発言の断片をかき集め、佚文集成を作成しながら読んでいる。そうした場合、錯綜した状況が生じるであろうことは容易に察しがつく。引用は原文のままと考えてよいかとといったあたりから検討をはじめねばならない。

弟子たちが残した真諦の伝記には「先生は漢語に堪能であり、通訳なしで何ら支障はなかった」とある。しかし弟子が師匠の言語能力を賞讃することと、それを我々がどう受け止めるかは別問題だ。真諦の著述とはされるが、実際には筆記した弟子の考えも入っているであろうし、総じて真諦個人の説というよりも彼のグループの説とも呼ぶべき性格がある。読解対象としてきた主なものは以下のとおり。『仁王般若経疏』『金剛般若経疏』『部執論疏』『金光明経疏』『撰大乘論義疏』『俱舍論義疏』『明了論疏』(以上、真諦による著作の佚文)、慧愷『撰大乘論疏序』『俱舍积論序』、および『続高僧伝』に収める真諦伝および関連する諸伝(道岳伝、曇遷伝)など。

班員

麥谷邦夫、稲葉 穰、古勝隆一、古松崇志、ヴィータ・シルヴィオ【所外】池田将則、石井公成、榎本文雄、大竹 晋、加納和雄、齋藤智寛、坂内栄夫、佐々木 閑、生野昌範、高崎直道、中西啓子、那須良彦、長谷川岳史、潘 哲毅、藤井 淳、松田和信、三宅徹誠、室寺義仁、吉村 誠

人文研探検

班長 菊地 暁、岩城卓二

本研究班は、まもなく開所80年を迎える京都大学人文科学研究所(以下、人文研)の歴史を多面的に探求することを目的とする。東方文化学院京都研究所(1929年設立)、独逸文化研究所(1933年設立)、京都帝国大学人文科学研究所(1939年設立)という、設立の経緯も組織の性格も異にする三組織を前身とする人文研は、その複雑な歴史ゆえに特異な構成をもち、幅広い分野にわたって独創性の高い研究を発信し続けるユニークな研究機関として知られることとなった。もとより人文研は一大学の一研究所に過ぎないが、その多年にわたる、また、多分野にわたる研究活動は、さまざまな意味で特権的事例であり、当研究所のみならず、日本の人文科学、ひいては日本の近代／現在のあり方を再検討する契機となりうるはずである。

本研究班の対象は、人文研の活動により産み出されたさまざまなプロダクトである。大別して①作品、②人材、③資料、④方法、がある。①は、単著、学術論集、新書版の啓蒙書など、人文研の研究者ならびに研究班により執筆された多様な著作物、②は人文研が擁した多様な人的資源、ならびに、所外・学外とさまざまなレベルで結ばれた重層的な人的ネットワーク、③は人文研の研究ならびに付随する活動により集積された図書資料、考古資料、写真資料など、形態も来歴も多様な資料群、④はいわゆる「カード・システム」といった資料整理スキルから、「共同研究」の運営スタイルに至る、さまざまなレベルの方法的蓄積である。これらの四つの次元を相互に関連させながら、その研究活動を支えた時代状況との相関において把握することが本研究班の課題となる。当面は資料の収集・整理に重点が置かれることになるが、それらを踏まえた上で、所史をめぐる研究を進め、論考の作成に取り組む予定である。

班員

李 昇燁、小野寺史郎、黒岩康博、高井たかね、高木博志、高階絵里加、永田知之、古松崇志、宮 紀子、向井佑介【所外】谷川 穰

西陲發現中國中世寫本研究

班長 高田時雄

20世紀初頭、ヨーロッパ諸国や日本の調査隊によって、甘肅、新疆の遺跡で数多の古写本が発見された。漢文写本がもっとも多いが、他にもチベット語、コータン語、ウイグル語、トハラ語など古代言語で書かれた写本もあり、古代西域の歴史、社会、文化、宗教を研究する貴重な資料である。なかでも敦煌や吐魯番から発見された文献は最も豊富で、世界各国に分散しているために、それぞれ敦煌学や吐魯番学といった国際的な研究分野が形作られてきた。

ところが21世紀に入った現在、これらの写本研究はまったく新しい段階に入ったといえる。その第一は、世界各地に所蔵されている写本の公開が進み、研究者の写本に対するアクセスが格段に改善されたことである。大型の図録出版によってほとんどすべての写本が居ながら閲読できるようになった。また新しい技術の発展により、ネット上で精細なカラー画像が見られるようになった。第二は、データベースの発展によって、これら写本のテキスト検索が可能となり、そのコーパスは日々完全なものに近づきつつあることである。こういった研究環境の変化は、当然ながら研究方法の改変に繋がらざるを得ず、国際的な連携に基づく、より網羅的、より総合的な研究が要請されることになる。本研究班はその動向に即応し、日本として然るべき貢献を果たすために組織された。

対象は既知の写本だけではない。近い過去においても、莫高窟北区の新出写本が報告されたり、吐魯番の墓葬からは新中国になって以降も続々と写本が発見され、資料は今なお着実に増加しつつある。さらに倉庫に眠っていた過去の調査隊による発見品が新たに発掘されるような事例すらある。新しい環境のもとで新しい研究を展開する条件は今こそ熟しているというべきである。

班員

池田 巧、稲葉 稯、永田知之、藤井律之、ヴィータ・シルヴィオ、高 啓安、余 欣、山口正晃 【所外】 辻 正博、山口正晃、赤尾榮慶、岩尾一史、落合俊典、玄 幸子、松浦典弘、山本孝子、米田健志、ガランボス・イムレ、中田裕子

外から見た近代日本の記録

班長 VITA, Silvio

19世紀以降、旅行、在日勤務、長期出張などの目的で日本を訪れた外国人が、多くの記録資料を書き残したことが知られている。それらは当時、様々な形で読まれたものであるし、日本においては現在も読まれ続けている。ただし、それらの資料の総体を整理分類し、多面的なアプローチによって分析するという作業は十分に行われているとは言いがたい。この点に貢献することが、本研究班の主旨である。年代的に言えば19世紀の半ばから20世紀半ばまでの約百年間、いわゆる「長い19世紀」を対象とし、その期間を通じて、世界の中で近代日本がいかにして形成されていったのかを検討してみたい。

日本について書かれた諸資料を読むにあたっては、様々な側面を考慮する必要がある。近代日本と外の世界との関わりはもちろんのこと、日本という存在がそれぞれの国の知識人や大衆の文化の中でどのような位置を占めたのか、そしてまた日本を訪れて記録を残した人々が、そのような日本の位置づけにどういう形で関わっていたかという点などである。本研究班では、それらを念頭に置きつつも、上述の諸資料を「近代日本の記録」として読むことを基本とする。ただ同時に、近年、文化史研究において意識されている、「見る」行為、「見る」側の立場によるアプローチや内容の差異、という点にも注意しておきたい。

本研究班のもう一つの目的は、同種の資料を専門とする、あるいは関心を持つ、国内外の研究者を招くことにより、研究ネットワークおよび研究者ネットワークを構築することである。研究班を通じて整理分析された資料を、研究資源としてそのようなネットワークの中に置き、活用していくことで、「外から見た近代日本の記録」研究の成果を、再度「外」へ向けてフィードバックすることが可能となるだろう。

班員

田中雅一、稲葉 稯、小池郁子、ジャケ・ブノワ 【所外】 岩倉具忠、岩倉翔子、佐野真由子、谷口陽子、ベルテリ・ジュリオ

第一次世界大戦の 総合的研究に向けて

班長 山室信一、岡田暁生

1914年から始まった第一次世界大戦（以下では第一次大戦と略記）は、21世紀の今日なお、その中にわれわれが生き続けているところの「現代世界」の幕開きを荒々しく告げる出来事であった。戦争のグローバル化およびボーダレス化、技術開発競争、科学界・産業界までも巻き込んだ総力戦、理性への不信、教養文化の崩落と科学技術崇拜、国際協調システムの模索など、現在でもわれわれは第一次大戦がもたらした衝撃の只中にいるといっても過言ではない。第一次大戦とともに始まったこの時代は、たとえばホブズボームのいう「短い20世紀」のように、ソ連・東欧の社会主義の崩壊とともに終結したわけではなく、それはむしろ「長い20世紀」として現在にまで及んでいる。しかもロシア革命およびマルクス主義が世界的規模において有した絶大なインパクト自体が、第一次大戦による「西洋の没落」（シュペングラ）とその克服の模索を背景としていたと捉えれば、社会主義の崩壊によって、我々はまさに第一次大戦がもたらした境位に再び改めて直面しているときえ言えるだろう。

このような第一次大戦のインパクトの内質を、文化の垂直軸（文化ジャンル横断的）および水平軸（通文化的）の両面で検討し、同時に大戦後世界（第二次世界大戦を含む）を視野に入れつつ模索することが、本研究班の目的である。1年目となる2007年度は、芸術、政治、経済、社会、思想のさまざまな分野において、第一次大戦がどのような位置を占めていたかについて発表者に問題提起をしてもらい、その共通点と相違点を探った。また2008年度には、全学共通科目の提供、レクチャーコンサートの開催などを通して、社会発信も積極的に行ない、ブックレット出版も構想されている。

班員

李昇燁、王寺賢太、大浦康介、籠谷直人、久保昭博、小関隆、坂本優一郎、高木博志、高階絵里加、田中雅一、田辺明生、藤原辰史、水野直樹、石川禎浩、富永茂樹、竹沢泰子、加藤和人、立木康介、伊藤順二

中国絵画の総合的研究

班長 曾布川寛

絵画は中国造形芸術の最も主要な分野のひとつである。最古の甲骨文字にみられるように、諸々の物象、事象、観念を絵画表象的な象形文字によって表した古代から、抽象、具象、非具象など多様な形式によって織りなされる現代に至るまで、絵画は最も重要な表象手段であり、また最も明確に時代を映し出す鏡であった。文字が概念によるとすれば、概念化される以前の初々しくも、より鋭い知覚による表象であり、その認識の重要性は言うまでもなからう。1枚の絵は1冊の書物以上に多くのことを語っているのである。要は、そうした表象の産物である絵画からいかに多くのことを汲み取れるかである。

本研究班は、出土文物としての古代・中世の絵画作品、伝世する近世の絵画作品などを取り扱う。これらの資料はめざましい発掘や所蔵品の公開などにより、近年ますます増加の一途をたどっているが、多くは未消化のまま放置されているのが現状である。この膨大な資料に対して、まずデータベースにより系統的な整理を試みる。資料データは可能な限り収集することにし、新石器時代から現代まで、宗教、非宗教を問わず、また中国だけでなく周辺の朝鮮、日本、中央アジア、インドにも触手を広げる。それぞれが関連し合っており、中国だけではすまされないのである。そしてこれらの資料に対して従来のような一律的なアプローチではなく、多方面からのアプローチを試みる。様式論、図像学、絵画理論、技法、材料はもとより、関連芸術としての文様、書法、詩文、またパトロン、蒐集、流通、更にアジアにおける広域な交流も加え、総合的な研究を試みる。こうすることによって偏狭な絵画解釈を免れるとともに、作品に絵画史上の的確な位置を与え、生き返らせようとするのである。

班員

田中淡、金文京、岡村秀典、向井佑介【所外】板倉聖哲、稲本泰生、大内文雄、大原嘉豊、岡田健、影山悦子、河野道房、齋藤龍一、定金計次、下野健児、竹浪遠、塚本磨充、出川哲朗、外山潔、西上実、西林孝浩、藤岡穰、古田真一、山名伸生、山中理、呉泳三、張南南、西尾歩、徐男英、金銀児

中国古鏡の研究

班長 岡村秀典

中国古代の銅鏡は、図像紋様の変化がいちじるしく、紀年銘をもつものがあることから、考古資料の年代をはかる指標として東アジア各地で重視されてきた。また、その図像と銘文は、人びとの精神世界をものがたる資料としても注意されてきた。鏡は姿見の化粧具として用いられたほか、そのかがやきは日月の光になぞらえられ、心情や世相をありのままに映し出す性質をもつとみなされたのである。

本研究班は、漢魏晋代の鏡の銘文をもとに、当代の文化史を解き明かそうとするものである。手はじめに会読したのが Karlgren, “Early Chinese Mirror Inscriptions” (BMFEA, No.6, 1934) である。カールグレンは『詩経』の音韻論から上古音を復元した言語学者で、韻文となった漢魏晋代の鏡銘は、上古音から中古音への変化をあとづける同時代資料として着目されたのである。257例の鏡銘について解説したこの論文は、発表から70年あまりを経たいまでも、これをこえる研究はないのが現状である。そこで、研究班では3年をかけてカールグレン論文を会読し、2008年度からはそれをふまえた新しい研究に取りかかっている。カールグレン論文以後に報告された銘文を加え、漢魏晋500年の変化がわかるような鏡銘の集成と注釈の作成である。記録には残りにくい民間の言葉づかいや思潮など、鏡銘には伝世文献ではわからない情報が少なくない。また、発掘資料を用いることによって、その韻文が流行した時代と地域が特定できることも考古学の強みである。中国文学史で西晋詩と考えられていた韻文が、300年前の前漢鏡に出現していたことがわかったのも、その成果のひとつである。カールグレンをのりこえ、つぎの70年のスタンダードをめざし、このような研究成果を『東方学報』に順次発表していく予定である。

班員

金 文京、曾布川 寛、向井佑介、鞆 文 【所外】 下垣仁志、森下章司、光武英樹、廣川 守、山 泰幸、原田三壽、福田美穂

中国社会主義文化の研究

班長 石川禎浩

冷戦体制の終結以後、いわゆる“社会主義の文化”は世界中で急速に風化しつつある。今日の中国でも、事情はさほど変わらないかに見えるが、数十年の蓄積を持つ社会主義的な文化様式やイデオロギーはなお根強く残存している。巨大な宣伝画（ポスター）や標語（スローガン）が今なお幅を利かせていることは、その最も見やすい例であろう。これに限らず、いわゆる“社会主義の文化”は、とりわけ経済面での開放が進めば進むほど、体制維持のための文化的なタガとしての役割を負わされ、一般民衆の思考様式になお影響を与え、現体制の文化政策を方向づけ、そして中国共産党の歴史記述を強く規定しているのである。

本研究班は、こうした中国の社会主義文化の位相を、中国に社会主義思想が伝播した20世紀初頭から今日に到る100年のタイムスパンの中で、思想、文化、政治などの面から歴史学的手法によって解明しようとするものである。中国共産党について言えば、その歴史の実相の解明が目指されるだけでなく、自党の歴史が共産党自身によって如何に表現されてきたのかという歴史記述の変遷までもが俎上に載せられるであろう。清末・民国における社会主義理解や1930年代の左翼文化、延安時期の文芸政策、人民共和国時期の学術領域・学術規範の再編や文学や芸術も、当然に解明すべき対象となる。また他方で、20世紀中国における社会主義文化の展開は、同時代日本の社会主義文化の影響を受けたばかりでなく、戦後には中国学をはじめとする日本の文化史に大きな影響を与えたという文化交渉の側面も忘れてはなるまい。なお、本研究班は、2007年4月に発足した現代中国研究センター（現代中国地域研究推進事業京都大学拠点）の研究グループ1（テーマ：現代中国文化の深層構造）の事業の一環をなしている。

班員

岩井茂樹、金 文京、水野直樹、森 時彦、山崎 岳、小野寺史郎、袁 広泉、汪 朝光

長江流域社会の歴史景観

班長 森時彦

長江は青海高原に源を発し、6300キロにわたって兩岸を潤した後、大海に入る。その流域面積は180万平方キロ、日本のほぼ5倍に達する。ここに形成された長江流域社会は宋代以来、中華世界の心臓部ともいべき役割を果たしてきた。とくに下流の長江デルタ地帯は、稲作を中心とする豊かな経済を背景に優れた学術、文化を育んできた。

本研究班(2008年4月～2011年3月の3年計画)は、長江流域社会が如何に形成され、如何に発展して近代世界と向きあうようになり、そして中国社会に如何なる影響を及ぼしたのかといった様々な問題を人文学的、とりわけ歴史学的なパースペクティブから多角的に解明することを目指してスタートした。

この研究計画はまた同時に、人文科学研究所附属現代中国研究センターが人間文化研究機構との共同事業として推進している「人文学の視角から見た現代中国の深層構造の分析」というテーマの総合研究(2007年4月～2012年3月の5年計画)の一翼を担うものでもある。現代の中国社会は如何なるプロセスを経て形成されてきたのかというトータル課題を、その中枢部である長江流域社会を例にして検討してみようという試みである。

班員は京阪神各大学の研究者が多くを占めるが、とくに博士課程からポストドクターにかけての若手研究者が多数にのぼる点が際立っている。さらに最近では、中国、欧米などの外国人研究者にゲストスピーカーとして研究成果を披瀝していただく機会も頓に増え、中国近現代史研究の国際拠点としても機能している。

班員

石川禎浩、岩井茂樹、籙谷直人、金文京、袁広泉、小野寺史郎、桑兵、汪朝光【所外】江田憲治、高嶋航、蒲豊彦、片山剛、岡本隆司、金丸裕一、川井悟、菊池一隆、楠原俊代、小島泰雄、小浜正子、佐藤仁史、柴田哲雄、中島勝住、中村哲夫、西川真子、浜田直也、濱田麻矢、弁納才一、細見和弘、森紀子、林原文子、滝田豪、箱田恵子、三宅康之、韓燕麗、武上真理子、若杉邦子、竹内理輝、田中剛、久保純太郎、早川敦、宮原佳昭、陳來幸、糸山大樹、上田貴子、川尻文彦、高瑩瑩、関根真保、田辺章秀、宮内肇、村田省一、森岡優紀、鹿雪瑩、大坪慶之、梶原真、項巧鋒、柴田陽一、周健

伝統中国の生活空間

班長 田中淡

中国の伝統的な生活空間、すなわち具体的には、住まいをはじめとして、都市、宮殿、佛寺、道観、陵墓、壇廟、庭園、その他、各類型の建築の空間と造形にみられる通時的な特質を探ろうとする。住まいの根幹にかかわる部分だけでなく、室内の空間配置、主客の座、あるいは食事、被服、家具調度、室内装飾、什器など、暮らしに不可欠な構成要素の実体的な側面から衣食住にかかわる諸相をとおして、中国文化に特有の因子を浮かび上がらせようというのがねらいである。

従来、中国の歴史は、古代から近代にいたるまで途絶えることのない膨大な分量の文献史料と相俟って、きわめて精度の高い研究が今日まで蓄積されてきた。その一方では、皇帝の宮殿や陵墓における祭祀儀礼、もしくは士大夫の住まいについては冠婚葬祭の儀礼に直接かかわる伝承の類は別として、こと日常生活の実際については、夥しい文献のなかのごく僅かな文学的描写を通じて推測するしかないのが実情である。この種の領域にまつわる事象は、本来とり立てて広く興味を惹起する性質のものでもなく、意識して記録されないのが定めだから当然ともいえようが、すくなくとも中国の伝統的住まいの空間、意匠、構造について私たちがほとんど知識をもたないに等しいのは、不都合な情況というほかはない。

資料的な制約についてはすでに承知のうえ、中国学の関連分野、および東アジア、周辺地域の専門家の参加を得て、文献と実物の双方を視程に据えつつ、共同研究としても初めての試みになる主題をとりあげる所以である。随時の研究発表と併行して文献会読をすすめる。主題に合致する班員共通のテキストとして、もっぱら一般には看過された類の用語を彙編した明の方以智『通雅』巻38宮室をとりあげる。

班員

岡村秀典、曾布川寛、武田時昌、高井たかね、向井佑介、福田美穂【所外】伊従勉、西垣安比古、山岸常人、大平桂一、川本重雄、黄蘭翔、外村中、豊田裕章、中嶋長文、中原健二、箱崎和久、細谷豪、堀尾尚志、吉田雅子、渡部武、塚本明日香、長沼さやか

唐代文学の研究

班長 金文京

本研究班は、正倉院所蔵の光明皇后御筆『杜家立成雑書要略』の講読を通じて、唐代の文学と書簡との関係を考えることを目的とする。『杜家立成雑書要略』は初唐の人、杜正倫の作と考えられる書儀（書簡文例集）で、「雪寒喚知故飲書」（雪の寒い日に友達を呼んで酒を飲む）など18の設定での往復2通、計36通の文例からなる。中国では早くに散逸し、日本にのみ残る貴重な資料である。またその内容からは、初唐の下層文人の生活の諸相を読み取ることができ、彼らが中心となって形成されたこの時代の新しい文学との相互関係が注目される。

近年、敦煌で発見された唐代の書儀についての研究が中国でも盛んだが、『杜家立成雑書要略』は敦煌の書儀に較べて時代的に早く、かつ敦煌書儀の大部分が冠婚葬祭に際しての儀礼的なものであるのに対して、友人間の私的な書簡である点に特色がある。

研究班では敦煌書儀も視野に入れつつ、書儀の用語と詩文など文学の用語との異同に注意を払いながら講読を進めている。書簡はもとより実用文であるが、一面では創作的な要素もあり、特にその修辭は文学と密接な関係にあると考えられるからである。

書儀は中国のその後の時代、また朝鮮半島や日本においてもそれぞれ独自のものが作られており、それらの間の影響関係やそれぞれの時代地域における文学と書信との関係、たとえば『万葉集』と『杜家立成雑書要略』の関係なども関心の延長上にある。将来的にはさらに研究範囲を広げ、中国における書簡文の形式、文体の変遷、また歴代の書簡文例集の特徴などを総合的に考察してみたい。期間は平成19～21年である。

班員

ウィッテルン・クリスティアン、古勝隆一、永田知之、宮 紀子、大野修作
【所外】川合康三、道坂昭廣、愛甲弘志、浅見洋二、乾源俊、釜谷武志、姜若冰、斎藤 茂、副島一郎、谷口 匡、林 香奈、上原尉暢、堂園淑子、二宮美那子、好川 聡、伊崎孝幸

東アジア古典文献 コーパスの研究

班長 安岡孝一

わが国の文化的活動は、奈良時代より随時もたらされた大量の中国の漢文と、それを訓読という手法によって解釈した歴史なしには語るができない。特に、近世、明治～昭和初期における漢文訓読という営為は、伝統的な日本の思想基盤を見直す作業であったとともに、近代国家としての思想基盤を再構築する過程において、重要な位置を占めるものであった。

本共同研究の構想は、その前身となった共同研究班「漢字情報学の構築」（2004年4月～2008年3月、班長：安岡孝一）で培われた知識、特に、コンピュータを用いた漢文解析に関する研究の中から生まれた。その中で、われわれは、日本における訓読が、元となる漢文とその読み下し文との間でそれぞれ異なる文法構造を橋渡しするための手法であることから、漢文の文法解析において有効に働きうるはずだ、という感触を得た。すなわち、訓読という手法を情報学的な視点から再検討し、訓読漢文コーパスともいべきものを作成して、それを他の一般的な漢文（白文）に適用することで、漢文の意味構造を解析可能になるだろう、という予想である。

本共同研究では、明治～昭和初期に日本国内で作成された訓読漢文テキストをコーパス化し、それを基に、漢文の意味構造を解析するシステムの研究・開発をおこなっている。すなわち、これまで漢文を読むための技法に過ぎなかった訓読を、コンピュータによる文法解析メソッドの一つとして、情報学的視点から捉えなおしている。この結果、文法的な構造化がおこなわれずに単なる文字列のままで放置されている大量の漢文に対して、その意味構造を解析することが可能となり、漢文の内容理解への大きな足がかりになると考えられる。

班員

池田 巧、ウィッテルン・クリスティアン、守岡知彦 【所外】山崎直樹、師 茂樹、二階堂善弘、鈴木慎吾、小林さとみ

複数文化接触領域の人文学

班長 田中雅一

わたしたちが、日本文化や縄文文化という言葉で理解するのは、まとまりをもった生活様式である。しかし、具体的になにが日本文化なのか、なにが縄文文化なのか、と考え始めると、そのまとまりを支えるはずの境界が曖昧模糊となってしまう。多くの学問は、こうした曖昧さを排除し、明晰さを求めて四苦八苦してきた。そこに学問的営為の意義を求めようとしてきた。しかし、結果はどうであろう。明晰さや純粹さを求めようとして、わたしたちは多くのことがらを追いはらい、無視してしまっていないだろうか。むしろ、雑種性や異種混淆という視点からこそより多くのことがらを学ぶことができるのではないだろうか。そこにこそ、文化を保持するのではなく、生み出そうとする創造性も認められるのではないか。

接触領域(コンタクト・ゾーン)をキーワードとする本研究班の目的は、文化の純粹性の追求という人文学の一般的な営為に発想の転換を促すことにある。具体的には、従来の一国を単位とする歴史・文学研究や地域を単位とする地域研究の問題点を踏まえ、周辺部を複数の文化が交わる接触領域ととらえて、文化実践のダイナミズムを考察する。

とはいえ、本研究班は、学術的なことがらだけにとどまるプロジェクトではない。より実践的な目論見もそこには含まれている。人文学の分野は専門が高度に細分化し、宗教対立や民族紛争など、時代の要請に十分に対応できないという指摘がなされて久しい。本研究班は、こうした現状を人文学が早急に克服しなければならない問題と認識し、共存や共生をキーワードに、現状克服の可能性を探る。

なお、本研究班は、人文学国際研究センターの基幹プロジェクトであり、そこで公刊している『コンタクト・ゾーン』誌は、本研究班の成果を広く公表する役割を担っている。

班員

稲葉 稯、高田時雄、田辺明生、藤井正人、船山 徹、小池郁子、ヴィータ・シルヴィオ 【所外】 奥山直司、徐 玉子、山本達也、磯前順一、大野哲也、神本秀壘、川西英里子、木下彰子、山野香織、二宮文子、藤原久仁子、真下裕之、宮本万里、松尾瑞穂、松嶋 健、谷口陽子、徳永誓子

北朝石刻資料の研究

班長 井波陵一

本研究班が所蔵する石刻資料は、重複分も含めて約1万点と言われ、内藤湖南、桑原隲藏といった碩学の名を冠したコレクションもある。かつて日比野丈夫氏が「中国金石資料の研究」(1968～1970年)という共同研究班を組織されて、カード作成や写真撮影を中心に整理作業を進められ、また漢代の石刻資料については、永田英正氏を班長とする共同研究班の成果報告として『漢代石刻集成』(同朋舎出版、1994年)が出版された。

その後、各種機関における情報公開が社会的使命として要求されるようになり、保存と利用という、ある意味で矛盾する事柄に、公開という第三の要素も交えて対処すべく、漢字情報研究センターでは石刻資料のデジタル画像化、フリーアクセスを実現したほか、安岡孝一氏の発案と努力によって「拓本文字データベース」も公開している。さらに『漢代石刻集成』の響みに倣って、『魏晋石刻資料選注』(人文科学研究所、2004年)も出版した。

本研究班ではこれら漢および魏晋の石刻資料会読を継承する形で、南北朝(とりわけ北朝)の碑文のうち、比較的まとまった文章が残されているものを選んで訓読と語注をつける作業を行っている。北魏を中心とする異民族政権が、「文明化の過程」の中で見せる様々な「揺れ」が、政治制度の上で、社会意識の上で、さらには文章表現や書体の上でどのような独自性をもたらしめているか、様々な分野を専攻する班員諸氏の多彩なコメントが楽しい。

なお、資料会読に先立って、当該碑文の拓本を広げ、先人の考証に依拠しながら細かく文字の対校を行っている。石の剥落などで読みにくくなった箇所を凝視し、頭の中で、あるいは指先で再現しながら、文字の原形を必死になって復元していく作業も、この研究班の大きな特徴である。

班員

富谷 至、永田知之、藤井律之、宮宅 潔、向井佑介、矢木 毅 【所外】 池田恭哉、今西智久、上野隆三、岡田和一郎、北村一仁、孫 正軍、辻 正博、成田健太郎、平塚順良、藤井政彦、道坂昭廣、山元宣宏、米田健志

教育活動と社会貢献

人文科学研究所は、多彩な研究活動に軸をおく一方、新しい世代の研究者を育成する教育活動にも力を注いでいる。また、研究成果の還元等を通じた社会貢献のための活動にも積極的に取り組んでいる。



教育活動

教育活動のうち、人文科学研究所がもっとも力を入れているのは大学院教育である。文学研究科では、文献文化学、思想文化学、歴史文化学、現代文化学の4専攻において17名の教授・准教授が協力講座を兼担し、院生の教育および研究指導に当たっている。また人間・環境学研究科では、共生文明学専攻において教授2名が協力講座に準ずるかたちで、地球環境学堂・学舎・三才学林では「両任制」による教授1名が、生命科学研究所とアジア・アフリカ地域研究研究科ではそれぞれ准教授1名が兼任教員として協力している。これ以外にも、授業担当あるいは非常勤講師として、毎年度10数名の教員が文学研究科をはじめとする複数の研究科に出講している。大学院教育担当者の多くは学部学生にも開かれた授業を担当しているし、全学共通科目や新入生を対象とする少人数セミナー（いわゆる「ポケットゼミ」）にも数科目を提供している。また、後述する「人文研アカデミー」の枠内でも常時複数の全学共通科目を提供している。

本研究所の教育活動の中で特筆すべき点は、研究所の中核活動である共同研究そのものを通じて、学内外の博士課程以上の学生に対する専門的研究能力養成の場を提供していることである。学内外、国内外の幅広い専門家が集う共同研究の場で、先進的な研究や精緻なテキスト会談に参加し、多角的な討論の輪に加わる機会を与えることこそは、大学院教育の枠を越えた研究所独自の若手研究者育成機能といえるであろう。研究所ではまた、国内外からの研究生や研修員、ならびに日本学術振興会の特別研究員等を広く受け入れ、共同研究への参加、文献解読や論文執筆のための個人指導等を通じて、若手研究者の育成に努めている。

社会貢献

人文科学研究所の社会貢献活動としては、「人文研アカデミー」による定期講演会、各種講座・教室、シンポジウム、レクチャーコンサート等の開催があげられる。これは一般市民や学生を対象とする、研究所の共同研究や個人研究の成果を広く社会に還元するための活動で、近年は京都市生涯学習総合センター、NHK文化センター、関西日仏学館等との共催プログラムにも力を入れている。また高校生を対象とする「ジュニア・アカデミー」といった斬新な試みにも挑戦している。附属漢字情報研究センターが開催する漢籍担当職員講習会およびTokyo漢籍Seminarも、社会貢献活動の一環である。漢籍担当職員講習会は、漢籍に関する専門知識を有する図書館職員の養成を目的とするもので、初級および中級の級別講習会を毎年度開催している。また2004年度からは年1回、一般への漢籍知識および東洋学の普及を目的とするTokyo漢籍Seminarを東京で開催している。



第3回漢籍セミナーのポスター

講演会・人文研アカデミー

本研究所においては従来、定例の公開講演会として、開所記念講演と夏期公開講座を開催し、また年度末に定年退職となる所員がある年には定年退職記念講演会を行ってきた。開所記念講演は11月9日の開所記念日を祝し、毎年記念日に近い日時を選んで3名の講師により実施し、また夏期公開講座は毎年7月初旬の週末、4名から6名の講師が統一テーマのもと、主として一般市民を対象とした講演を行っている。

2005(平成17)年度4月にはこれらに加え、共同研究班の最新成果にもとづく「共同研究セミナー」、「レクチャーコンサート」、タイムリーな議題を討議する「特別シンポジウム」など、人文科学研究所が行う一連の講座、講演会等をまとめて「人文研アカデミー」として再編した。年間30回近くにおよぶ講座、講演会を通じ、研究所の研究成果の公開という従来の機能をさらに充実させるだけでなく、学内他部局や学外組織とも連携しつつ、大学という枠を越えた新たな情報発信、社会貢献の道を創出している。

2008(平成20)年度

4月17日、5月15日、6月19日、7月17日

金文京、宮宅 潔、永田知之、岩井茂樹、石川禎浩
「時代を生きた女性たち——中国編(楊貴妃から江青まで)」
(共催: NHK大阪文化センター)

4月15・22日、5月13・20・27日、6月3日

田辺明生「theory/practice ヨーガの理論と実践」

6月5・12・20・26日

田中雅一、妙木 忍、西村大志、岡田浩樹
「共同研究セミナー 身体=フェティッシュをめぐる技術——強壮剤、人体模型、サイバーブッダ」

7月5日

藤井律之、伊藤順二、高田時雄
「夏期公開講座 古典再読——いま読んだらこんなに面白い3」

7月19日

大浦康介、東 浩紀、ミカイル・クシファラス、g新部 裕
「特別シンポジウム いま著作権——知的財産権問題が問いかけるもの」
(共催: 人文学国際研究センター)

7月26日

菊地 暁、北原 恵、表 智之
「ジュニアアカデミー イメージを読む作法——写真、漫画、そしてドキュメンタリー」(共催: 京都大学総合博物館)

10月9・16・23・30日

稲葉 穰、向井佑介、下垣仁志、菱田哲朗
「共同研究セミナー アジアの仏教遺跡を掘る」

10月16日、11月20日、12月18日、2009年1月15日、2月19日

王寺賢太、小関 隆、田中祐理子、久保昭博、藤原辰史
「時代を生きた女性たち——ヨーロッパ編(マリーアントワネットからレニ・リーフェンシュタールまで)」(共催: NHK大阪文化センター)

11月18日

岡田暁生、小坂圭太
「第一次世界大戦のあと——狂乱の1920年代(カウエル、ゴドフスキ、ソラブジ、ガーシュインほか)」

11月20日

田中祐理子、矢木 毅、三山 陵
「開所79周年記念講演会」

12月5・6日

竹沢泰子、エラ・ショハット、トロイ・ダスターほか
「第12回京都大学国際シンポジウム 変化する人種イメージ——表象から考える」

2009年3月19日

「曾布川寛教授退職記念公開講演会」

2007(平成19)年度

4月10・17日、5月8・15・22・29日

田辺明生「ヨーガ入門」

4月24日

スワミー・アーナンダー師
「特別講演 ヨーガとは何か——その目的と方法」

5月17・24・31日、6月7日

岡田暁生、高階秀爾、石田美紀、塚原 史
「共同研究セミナー 第一次世界大戦と芸術——音楽・美術・映画・文学」

6月9・10日

田中 淡、ジェイムズ・C・Y・ワットほか
「伝統中国の庭園と生活空間」
(後援: 日本学術振興会、財団法人国際花と緑の博覧会記念協会)



7月14日

王寺賢太、井野瀬久美恵、岡田暁生
「夏期公開講座 名作再読——いま読んだらこんなに面白い2」

7月28日

藤井正人、浅原達郎、岩城卓二
「ジュニアアカデミー 人文学ことはじめ——古文学を学ぶ」
(共催：京都大学総合博物館)

10月4・11・18・25日

曾布川寛、吉田 豊、影山悦子、斉 東方
「共同研究セミナー 東西文化交流の主役——ソグド人の美術と言語」

10月5・12・15・26日

武田時昌、横山俊夫、田辺明生、田中祐理子
「養生の東西」(共催：京都アスニー)

10月20日、11月17日、12月15日

高木博志、水野直樹、岩城卓二
「教科書で学べない京都」(共催：NHK 京都文化センター)

11月5日

ジャン＝マリー・シェフェール、セバスチャン・ヴェグ、大浦康介、久保昭博
「西洋のフィクション・東洋のフィクション」

11月15日

中西裕樹、水野直樹、長野 仁
「開所78周年記念公開講演会」

11月27日

岡田暁生、小坂圭太(ピアノ)
「レクチャーコンサート 第一次大戦の前と後」

2008年3月25日

王寺賢太、市田良彦、廣瀬 純
「アントニオ・ネグリ講演 大都市とマルチチュード」

2006(平成18)年度

4月7・14・21・28日

高木博志、岩城卓二、高階絵里加、谷川 穣
「アスニー・ゴールデンエイジ・アカデミー 幕末・明治の京・大阪」
(共催：京都アスニー)

4月25日

岡田暁生、北住 淳(ピアノ)
「レクチャーコンサート フランツ・リストと超絶技巧の美学」

5月25日、6月1・8・15・22日

宇佐美斉、大浦康介、岡田暁生、高階絵里加、高木博志
「共同研究セミナー 日仏交感の近代文学・美術・音楽」

7月8日

金 文京、高橋世織、大浦康介
「夏期公開講座 名作再読——いま読んだらこんなに面白い1」

7月10日

山室信一、片山杜秀、藤原辰史
「特別シンポジウム 日本のなかのナチズム」

9月28日、10月5・12・19・26日

武田時昌、森村謙一、大平桂一、長野 仁、寄金丈嗣
「共同研究セミナー 東アジアにおける健康思想の系譜」

11月2日

田中 淡、加藤和人、坂本優一郎
「開所77周年記念講演会 生命のランドスケープ」

(表表紙)

- 右の写真、中国の雲岡石窟第20洞大仏
- 左の写真、パキスタンのガンダーラ平原、メサハンダ寺院址出土の供養者頭部
- 下の写真、インド・オリッサの女性。自宅の入り口に飼われた牛の世話をしている

(裏表紙)

- 中央の写真、名勝道順双六(部分)、1906(明治39)年製作の京都みやげ
- 左の写真、インド・オリッサの男性たち。戦士カーストの集落にて

京都大学 人文科学 研究所

要覧

2008

人文科学研究のフロンティア

2009年3月15日 印刷

2009年3月20日 発行

非売品

編集・発行 京都大学人文科学研究所
〒606-8501 京都市左京区吉田本町
Phone 075-753-6902

編集協力 木村 滋

デザイン・DTP 柴永事務所

印刷 株式会社公栄社

©京都大学人文科学研究所 2009

*無断転載を禁じます



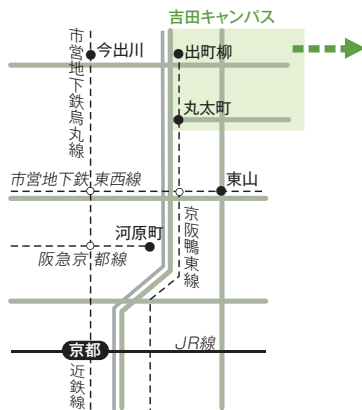
本館
人文科学研究所本館

〒606-8501
京都市左京区吉田本町
Phone:075-753-6902
Fax:075-753-6903
E-mail:annai@zinbun.kyoto-u.ac.jp
http://www.zinbun.kyoto-u.ac.jp/

分館
漢字情報研究センター

〒606-8265
京都市左京区北白川小倉町47
Phone:075-753-6997
Fax:075-753-6999
E-mail:annai@zinbun.kyoto-u.ac.jp
http://kanji.zinbun.kyoto-u.ac.jp/

本部構内



本館へのアクセス

- 市バス 京都駅 (JR・近鉄) から**
 17系統 河原町通・錦林車庫行「京大農学部前」下車
 206系統 東山通北大路バスターミナル行「百万遍」下車
- 河原町駅 (阪急) から**
 3系統 百万遍・北白川仕伏町行「百万遍」下車
 17系統 河原町通・錦林車庫行「京大農学部前」下車
 31系統 岩倉操車場行「百万遍」下車
 201系統 百万遍・千本今出川行「百万遍」下車
- 今出川駅 (市営地下鉄) から**
 201系統 百万遍・祇園行「百万遍」下車
 203系統 銀閣寺・錦林車庫行「京大農学部前」下車
- 東山駅 (市営地下鉄) から**
 31系統 岩倉操車場行「百万遍」下車
 201系統 百万遍・千本今出川行「百万遍」下車
 206系統 東山通北大路バスターミナル行「百万遍」下車
- 出町柳駅 (京阪) から**
 201系統 百万遍・祇園行「百万遍」下車
 203系統 銀閣寺・錦林車庫行「京大農学部前」下車
- 徒歩** 出町柳駅 (京阪) から 徒歩約15分
 丸太町駅 (京阪) から 徒歩約20分
- タクシー** 今出川駅 (市営地下鉄) から 約10分、800円くらい

分館・漢字情報研究センターへのアクセス

- 市バス 京都駅 (JR・近鉄) から**
 5系統 岩倉操車場行「北白川校前」下車
 17系統 錦林車庫行「北白川」下車
- 河原町駅 (阪急) から**
 5系統 動物園・岩倉操車場行「北白川校前」下車
 17系統 錦林車庫行「北白川」下車
 203系統 祇園・錦林車庫行「北白川」下車
- 今出川駅 (市営地下鉄) から**
 203系統 祇園・錦林車庫行「北白川」下車
- 出町柳駅 (京阪) から**
 17系統 錦林車庫行「北白川」下車
 203系統 祇園・錦林車庫行「北白川」下車
- 徒歩** 出町柳駅 (京阪) から 徒歩約25分
- タクシー** 今出川駅 (市営地下鉄) から 約15分、1000円くらい
 出町柳駅 (京阪) から 約10分、800円くらい



Institute for
Research in Humanities,
Kyoto University

